

定延利之

1. はじめに — 本稿の中心課題

定延(1989)以来、筆者は(1)~(4)に例示する現象に関わってきた。

- (1)a. クラブがボールに当たる。 (2)a. クラブをボールに当てる。
b. ボールがクラブに当たる。 b. ボールをクラブに当てる。
(3)a. わなが兎からはずれる。 (4)a. わなを兎からはずす。
b. 兎がわなからはずれる。 b. 兎をわなからはずす。

(1a)において、ガ格で表示されている名詞句はクラブであり、ニ格で表示されている名詞句はボールである。格助詞ガ・ニを固定したまま、この2つの名詞句を相互に交換すると(1b)を得る。もちろん、(1b)に同様の措置を施せば(1a)を得る。(2)においては、格助詞ヲ・ニを固定したまま、(2a)のクラブとボールを相互に交換すれば(2b)が得られ、(2b)のクラブとボールを相互に交換すれば(2a)が得られる。(3)(4)も(1)(2)とほぼ同様で、格助詞ガ・カラを固定したままわな・兎を相互交換すれば、(3a)から(3b)が、(3b)から(3a)が得られる。格助詞ヲ・カラを固定したままわな・兎を相互交換すれば、(4a)から(4b)が、(4b)から(4a)が得られる¹⁾。

(1)について筆者が注目してきたのは、「(1a)と(1b)が、物理的外形において同じ事態の表現形式たり得る」という判断を、相当数の話者が認容するという事実である。もっと具体的にいえば、相当数の話者にとって、[静止しているボールに向かってクラブが動き、両者が衝突する]という、ゴルフ場でよく見かける事態は、(1a)だけでなく(1b)でも表現可能だ、という事実である。(2)についても同様で、相当数の話者にとって、[静止しているボールに向かってクラブを動かす、両者を衝突させる]というゴルファーの動作は、(2a)だけでなく(2b)でも表現可能である。(3)についても同様で、相当数の話者にとって、[わなにかかって静止している兎があり、わなだけが動いて、両者の一体関係が解除される]という事態は、(3a)だけでなく(3b)でも表現可能である。(4)についても同様で、相当数の話者にとって、[わなにかかって静止している兎があり、わなだけを動かして、両者の一体関係を解除する]という事態は、(4a)だけでなく(4b)でも表現可能である。こうした事実を、筆者はこれまで注目してきた²⁾。

これらの話者が認容する現象を、定延(1989,1990)では「弾当て代換」と仮称して考察した。定延(1990)で述べた弾当て代換の定義を、自動詞文・他動詞文に分けて(5)に記す。

- (5)a. 何らかの移動を表す自動詞述語文において、格助詞ガで表示されている名詞

句と、格助詞ニまたは格助詞カラで表示されている名詞句とを相互に交換しても、文の知的意味が変わらない。

- b. 何らかの移動を表す他動詞述語文において、格助詞ヲで表示されている名詞句と、格助詞ニまたは格助詞カラで表示されている名詞句とを相互に交換しても、文の知的意味が変わらない。

従来、弾当て代換について全く研究がなかったかといえば、そうではない。筆者の知る限りでは自動詞文について金田一(1982)・寺村(1982)、他動詞文について森田(1988)の記述がある。が、金田一(1982)・寺村(1982)は文字通り1例を挙げて簡単な記述を付したにとどまるもので、森田(1988)も料理を手に触れるといった触れるの表現に記述対象を限っている。これらの研究が当の現象を「弾当て代換」として記述しているわけではなく、当の現象には呼び名が一切与えられていない。そこで定延(1989,1990)では、この現象を集中的に考察する都合上、「弾当て代換」と呼んだ。4章で後述するが、弾当て代換と多少似ている現象の1つには「壁塗り代換(spray paint hypallage)」という呼び名が与えられているようで(たとえば奥津1981参照)、「弾当て代換」はこの「壁塗り代換」にならった筆者の造語である。本稿でもこう呼んでおきたい。

定延(1989,1990)でも述べたことだが、本稿でも初めにいっておきたいのは、弾当て代換を認容しない話者も存在するということである。ゴルファーがクラブでボールを叩く上の(1)(2)例でいうと、(1a)や(2a)による表現は可能だが、(1b)や(2b)による表現は不自然だと判断する話者が、存在するわけである。これは重大な事実であり、弾当て代換を認容する話者が存在することと同じ程度に、尊重すべきものだろう。さらに、弾当て代換を認容する話者にとっても、(1b)(2b)タイプの表現は、いつでも無制限に許容されるというものではない。定延(1989,1990)では以上の事実をふまえ、(6)の解明を試みた。

(6)a. 弾当て代換を認容する話者にとって、(1b)(2b)タイプの表現は、どのような場合に自然なのか？

- b. 弾当て代換を認容する話者と、弾当て代換を認容しない話者との共存は、どのように説明され得るか？

(6a)の問題に対して定延(1989,1990)では、(1b)(2b)タイプの表現の自然さに関わる幾つかの要素を提出した。そして(1b)(2b)タイプの表現の自然さに、それらの要素がなぜ、どのように関わるのかを説明した。そしてその説明の中で、(6b)の問題も同時に処理された。定延(1989,1990)で提出した要素を一部修正の上、(7)に挙げる。

(7)a. [表現者の注意]

- b. [ホスト性][影響性]

c. [事態の成立過程][事態の成立結果]³⁾

d. 文の[対称性]⁴⁾

しかし定延(1989,1990)では、(7d)つまり文の[対称性]に関しては概略のみを述べるにとどまった。残念ながら、対称性に関する研究は、これまでにあまり進んでいない。基礎的な作業のいくらかは、たとえば仁田(1974,1980)などでなされてきたが、記述領域は限定されているといわざるを得ない。対称性に関する理解を深め、記述領域を拡張した上でなければ、(7d)を詳しく述べることはできないが、それは定延(1989,1990)では紙数の関係上、不可能であった。

本稿の中心課題は、対称性に関する考察を発展させ、これまでうまく扱えなかった様々な現象(弾当て代換もその1つである)を、新しく構築された枠組みの下に正しく位置づけることである。特に後半の課題については、弾当て代換を中心としたい。その前提として—これも紙数の関係上、定延(1989,1990)では果たせなかったことだが—弾当て代換を認容しない読者のために、(1b)(2b)タイプの表現が用いられている様々な実例を紹介し、「弾当て代換を認容する話者が存在する」ことに関して理解を得ておきたい。

筆者は今後、定延(近刊b)などにおいて、[2文間の同義性]と[名詞句が担う、いわゆる深層格]の問題に立ち入る予定だが、本稿で構築しようとする対称性の枠組みは、こうした今後の考察にとって、基盤となるものである。

本稿の中心課題の説明は以上で終わるが、この先を読もうか、それともやめようかと迷っている読者のために2つ、ごく簡単ながらアピールを行っておきたい。まず次の1.1では、弾当て代換の面白さをアピールしておきたい。これは「なぜ弾当て代換が取り立てて考察するに値するのか」という問いに対する答である。次に1.2では、弾当て代換以外にも、従来注目されていなかった様々な現象が、本稿で扱われることを、できるだけ具体的な例文を挙げてアピールしておきたい。

1. 1. なぜ弾当て代換か？

自然言語が表す意味は、しばしば(8)のように、2つのレベルに分けられる。

(8)a. 表現される事態が有する客観的事情のレベル

b. 表現される事態(や事態構成物)に対する表現者の態度というレベル

(8a)はいわゆる「論理的意味」「知的意味」「真偽値」などが関わるレベルであり、事態を構成する骨組みのレベルとあってよい。対して(8b)は、状況ごと、表現者ごとに異なり得るもので、(8a)よりもっと「柔らかな」意味と考えられてきたものである。

これまで、2文間の同義関係を、名詞句が担う深層格(及びそれに類するもの)で捉えようとする場合には、(9)にまとめられるような考え方が支配的であった⁵⁾。

(9)a. (8b)には注目せず、(8a)だけに注目すればよい。

- b. 深層格は、(8a)のレベルに属するものであり、(8b)とは無縁である。
- c. 特に移動事態の場合、[或る事態構成物はその事態において移動するのか静止しているのか]という違いは、主観的な(8b)のレベル上の違いではなく、客観的な(8a)のレベル上の違いである。従ってその事態構成物を表す名詞句は、移動か静止かによって、異なる深層格を担う。
- d. 移動事態においては、Objective⁶⁾を担うのは、移動している事態構成物を指示する名詞句であり、これは単文中、ガ格やヲ格で表示される。GoalやSourceを担うのは、静止している事態構成物を指示する名詞句であり、これは単文中、ニ格やカラ格で表示される。

今「(1)~(4)のクラブ・ボール・わな・兎がObjective・Goal・Sourceのいずれかを担う」という前提に立てば、弾当て代換は(9)を根底から揺さぶる現象になる。これを便宜上、(9d)から説明する。

(1)~(4)について上で見たように、少なくとも相当数の話者にとって、移動する事態構成物を指示する名詞句は単文中、ニ格やカラ格で表示可能であり、静止する事態構成物を指示する名詞句は単文中、ガ格やヲ格で表示可能であった。従って、(9d)は反例を持つことになり、修正の必要が生じる。素直に考えられる修正の方向としては、(10a)(10b)という2つの方向がある。

(10)a. 事態構成物と深層格との対応は(6d)のまま温存する代わりに、深層格と格形との対応を犠牲にするという方向。つまり「移動事態においてObjectiveを担うのは、移動している事態構成物を指示する名詞句であり、これは単文中、ガ格やヲ格で表示可能だが、相当数の話者にとってはニ格やカラ格でも表示可能である。逆にGoalやSourceを担うのは、静止している事態構成物を指示する名詞句であり、これは単文中、ニ格やカラ格で表示可能だが、相当数の話者にとってはガ格やヲ格でも表示可能である」とする方向。

b. 事態構成物と深層格との対応を犠牲にする代わりに、深層格と格形との対応を(10d)のまま温存するという方向。つまり「移動事態においてObjectiveを担う名詞句は単文中、ガ格やヲ格で表示されるがこの名詞句の指示物は、相当数の話者にとっては、移動している事態構成物でも、静止している事態構成物でもよい。逆にGoalやSourceを担う名詞句は単文中、ニ格やカラ格で表示されるがこの名詞句の指示物は、相当数の話者にとっては、移動している事態構成物でも、静止している事態構成物でもよい」とする方向。

しかし、(10a)(10b)は共にad hocの感をぬぐえず、それを別としても、たとえば(11b)(12b)が全ての話者にとり不適合であることが説明できない。この点で(10a)(10b)は、(9d)より劣るといわざるを得ない。

(11)a. 一郎が家に着く。

b. *家が一郎に着く。

(12)a. 一郎を家から出す。

b. *家を一郎から出す。

結局、(10)の方向を貫こうとすれば、(6)に対する記述及び説明がせひとも必要になるわけだが、(6)を追求した定延(1989,1990)によれば、上述(7a)の[表現者の注意]が重要なカギとなる。

(6)a. 弾当て代換を認容する話者にとって、(1b)(2b)タイプの表現は、どのような場合に自然か？

b. 弾当て代換を認容する話者と、弾当て代換を認容しない話者との共存は、どのように説明され得るか？

たとえば[静止しているボールに向かってクラブが動き、両者が衝突する]という事態の表現として(1b)ボールがクラブに当たるが自然な時、表現者はクラブよりもボールに注意していなければならない。従って(10b)の方向では、深層格の認定に[表現者の注意]が関与することになり、(9d)と同時に(9a)(9b)(9c)を全て修正する必要が生じる。

以上のように弾当て代換は、(9)の全てに重大な影響を与えかねない。のみならず弾当て代換は(13)のような、より根元的な問いを提起する現象でもある。

(13)a. (8a)の「客観的事情のレベル」というのは、どの程度の客観性を射程におさめるのか？

b. そもそも言語学上有意な移動/静止とは、どのような概念か？

たとえば我々は、隣のホームに停止していた列車の出発を車窓から目撃することで、静止しているはずのこちらの列車が移動し始めるかのごとく感じることもある。言語学上有意な移動/静止という概念は、このような認知的な要素を全て取り込むべきなのか、それとも一切排除すべきなのか？ そのどちらでもないとすれば、どこまでを取り込み、どこからを排除すべきなのか？

(9)(13)に対する解答を、本稿で詳しく述べることはできないが⁷⁾、本稿の2章以下では、そのための重要な基礎的作業が展開されることになる。

1. 2. 弾当て代換以外に本稿で扱われる現象

本稿では上述のとおり、文間の同義性・格助詞の機能・深層格などを、文の対称性という観点から考察する。具体的にいうと2章以下の議論は、(14)に記した問題を軸として展開される。

(14) 2個の名詞句X・Yが適格文Aに共起しており、XとYとを相互に交換すると文Bを得るとする。この時 —

a. Bの適格性が高いのは、Aがどのような文の場合か？

b. 適格文Aと適格文Bの同義性が高いのは、Aがどのような文の場合か？

以下では、(14)を軸にして様々な現象が扱われることになる。弾当て代換もその1つだが、弾当て代換以外にも、筆者の知る限り十分な指摘・考察がなされていないかかった現象が指摘・考察される。それらを(15)(16)に記す。

(15)述部が[動詞連用形+合う/合わせる]型の文について

- a. 「一郎と花子が1本の木にもたれ合った」という場合、木をはさんで両側からもたれるという情景が通常思い浮かびやすい。たとえその木が大木であったとしても、並んでもたれたとは考え難い。これはなぜか？
- b. 「一郎と花子が1本の蠟燭の火を吹き消し合った」という場合、火は結局消えなかったという可能性も考えられる。これはなぜか？
- c. 生産的使役(たとえばまわらせる)には合うを付けてまわらせ合うとできるのに、対応する語彙的使役(まわす)には合うを付けてまわし合うとできない、という文脈がある。これはどういう文脈か？ それはなぜか？

(16)格助詞トの機能について

- a. 「XがYと～する」なら常に「YがXと～する」かという、そうとは限らない。「猫がボールとじゃれる」は適格だが「ボールが猫とじゃれる」は不適格である。「彼女が女だてらに彼と争う」は適格だが「彼が女だてらに彼女と争う」は不適格である。これらの文は、対称性を考える上でどのような位置づけが妥当か？
- b. さらに、「野菜を白味噌と和える」は適格だが「白味噌を野菜と和える」は不適格、と判断する話者が一部確認できる。この判断はどこから来るものか？
- c. 「一郎が彼女と再婚する」という場合、結婚を少なくとも1度経験していなければならぬのは一郎であって花子ではない。ところが「一郎が花子と死に別れる」という場合、結果として死ぬのは一郎ではなく、花子である。このような2文は、対称性を考える上でどのように位置づけられるのか？ また、この2文の違いは何を表しているのか？

1. 3. [対称性]の定義

議論に移る前に、本稿で用いる「対称性」という概念について、説明しておきたい。

本稿でいう対称性は、従来考えられている対称性(あるいは対称関係)とは、内容が異なる。従来の「対称性(あるいは対称関係)」の内容を、(17)に引用する。

- (17)a. ……対称関係は、2要素がその順序にかかわらず常に真である様な関係である。[中略]例えば「太郎は花子と結婚している」ということは、「花子は太郎と結婚している」と同じである。【奥津1967:2】
- b. <対称性>とは、次のような現象を指して言う。動詞が、二つ以上の<格>を自らの格支配として取る時、その二つの<格>を占める名詞句を相互に交換し

でも、交換以前の文が有する〈論理的意味〉と交換以後の文が有する〈論理的意味〉に変化が生じない。このような時、その動詞は、当の二つの〈格〉に対して、〈対称性〉を有していると言える。 [仁田1980:202]

- c. 二つの名詞がその格助詞を相互に交換しても、文の論理的意味関係を変えないような関係を「対称関係」(symmetrical relation)と呼ぼう。 [武市1979:98]
- d. 関係する2者のどちら側から見ても同じ事態が成立するという性質を「対称性」と呼ぶ。例えば、「鈴木さんが高津さんと協議した」という表現は、「高津さんが鈴木さんと協議した」と言い換えても同じ事態を表すので、対称性を持っている。 [益岡・田窪1989:78-9]

これらの考えに対して、本稿以下で用いる「対称性」の定義を(18a)に、その特色を(18b)~(18g)に記す。(18b)以下では、(18a)の意味での「対称性」を、特に「[対称性]」と記す。

(18)a. 2個のものを、「事態の中で等位置を占める均質なもの」として、文(または文の一部)がとらえようとする力の度合を、その2個のもの(事態構成物と呼ぶ)に対する、文(または文の一部)の対称性とする。原則として、或る2個の事態構成物に対して文の[対称性]が高いほど、その2個の事態構成物を指示する2名詞句の相互交換は、文の適格性や意味を保存しやすい。原則として、或る2個の事態構成物に対して文の[対称性]が低いほど、その2個の事態構成物を指示する2名詞句の相互交換は、文の適格性や意味を保存し難い。なお、ここでいう「文の一部」とは、述語・述語句⁸⁾・述部⁸⁾・名詞句に加えて、文型をも指すものとする。述語句・述部の定義は(注8)を参照。

また、不適格文における或る2名詞句の相互交換が、やはり不適格文を生む(つまり文の適格性(の低さ)を保存する)としても、その2名詞句の指示物に対する文の[対称性]が高いというわけではない。この場合、その2名詞句の指示物に対する文の[対称性]は、問えないものとする。

- b. [対称性]は、動詞述語以外の述語についても想定され得る。
- c. [対称性]は、述語についてだけ想定され得るものではなく、述語句・述部・名詞句・文型・文についても想定され得る。
- d. [対称性]は、必須格名詞句の指示物どうしに対してだけ想定されるものではなく、任意格名詞句の指示物どうしに対しても、また必須格名詞句の指示物と任意格名詞句の指示物に対しても、想定され得る。
- e. [対称性]は、あるかないかという2項的な把握よりはむしろ、高から低までの連続的な把握になじむ。
- f. 文の[対称性]は(a)のとおり、[文中の2名詞句の相互交換が適格性や意味

を保存する]という現象の成否と関わるが、この現象の成否自体を表すものではなく、あくまで文が持つ、抽象的な力の度合を指す。

- g. 文の[対称性]の高低は、文型の[対称性]の高低・述部の[対称性]の高低・名詞句の[対称性]の高低の3つに影響される。

対称性に関する従来の研究は、弾当て代換を取り込んでいない。そのためたとえば、「XがYとぶつかる」は双方に動きが感じられるが「XがYにぶつかる」はX'(=Xの指示物)にしか動きが感じられない、などといったナイーブな記述で済ませることができた。しかし、弾当て代換を認容する話者が存在する以上、「XがYにぶつかる」においてX'が動かず、Y'(=Yの指示物)のみが動くという可能性も認めないわけにはいかない。しかしその一方で、「XがYとぶつかる」と「XがYにぶつかる」には、やはり微弱ながら対称性に関して何らかの違いが感じられることも事実である。この違いは、「ぶつかる」を「キスする」に変更すれば、非常にはっきりしてくる。以上の諸事情を考慮して、本稿では(18g)のように、文型の[対称性]・述部の[対称性]・名詞句の[対称性]という多様な[対称性]を認め、それらの総和として文の[対称性]を認める立場をとる。この立場から、(14)の問題を軸として記述を進め、文の[対称性]と文形式との対応づけをはかる。

(14) 2個の名詞句X・Yが適格文Aに共起しており、XとYとを相互に交換すると文Bを得るとする。この時 —

- a. Bの適格性が高いのは、Aがどのような文の場合か？
- b. 適格文Aと適格文Bの同義性が高いのは、Aがどのような文の場合か？

次の2章では3章・4章の前提として、2個の事態構成物が事態の中で占め得る「等位置」を、文型との対応を中心に観察する。3章と4章では、文型の違いが文の[対称性]に及ぼす影響を中心に考察を進める。4章では弾当て代換を成立させる文の位置づけをも扱う。各章の結論は、最後の5章で簡単にまとめ直される。なお、以下の章でも上と同様、X'はXの指示物、Y'はYの指示物を表すとする。

2. X'・Y'が事態の中で占め得る「等位置」の観察

[対称性]の定義は(18a)中に記したとおりであるが、改めて(19)に述べ直す。

(19) 2個の事態構成物を、「事態の中で等位置を占める均質なもの」として、文(または文の一部)がとらえようとする力の度合を、その2個の事態構成物に対する、文(または文の一部)の[対称性]とする。

(19)には「等位置」という語があるが、ひとくちに「等位置」といっても、実にさまざまなものが考えられる。本章では3章・4章の前提として、この「等位置」を観察する。具体的にいうと、(20)~(27)の8文型に属する文によって、X'・Y'のどのような「等位置」が表現され得るかを観察する。[文がどのような「等位置」を表現し得るか]

は、述部の形式・意味もさることながら、[その文がどのような文型に属するか]に大きく影響される。

- | | |
|------------------------|------------------------|
| (20)a. [X ト Y(ト)] ガ P. | (21)a. [X ト Y(ト)] ヲ P. |
| b. [Y ト X(ト)] ガ P. | b. [Y ト X(ト)] ヲ P. |
| (22)a. X ガ Y ト P. | (23)a. X ヲ Y ト P. |
| b. Y ガ X ト P. | b. Y ヲ X ト P. |
| (24)a. X ガ Y ニ P. | (25)a. X ヲ Y ニ P. |
| b. Y ガ X ニ P. | b. Y ヲ X ニ P. |
| (26)a. X ガ Y カラ P. | (27)a. X ヲ Y カラ P. |
| b. Y ガ X カラ P. | b. Y ヲ X カラ P. |

(20)~(27)中、[]印は等位接続構造を、()印は生起の任意性を、「P」は述部を表す。(a)(b)の別は、名詞句X・Yの相互交換を表したものに他ならない。以下、[対称性]とはX'・Y'に対するものとする。特に動詞述語文の場合、自動詞述語文は文型(20)(22)(24)(26)のいずれかに、他動詞述語文は文型(21)(23)(25)(27)のいずれかに属するものとする。

便宜上、(20)(21)に属する文を「等位文」⁹⁾、(22)(23)に属する文を「ト文」、(24)(25)に属する文を「ニ文」、(26)(27)に属する文を「カラ文」と呼ぶ。等位文と、語順を変更されたト文との紛らわしさを考慮して、例文中必要と思える箇所では、等位接続構造に[]印を施す。

[文がどの文型に属するか]は、[その文中のどの名詞句がX・Yであるか]次第ということがある。たとえば文A₁「彼が彼女と銀行に出発する」は、X・Yが彼・彼女なら文型(22)に属するト文だが、彼・銀行なら文型(24)に属するニ文である。同様に文A₂「彼が彼女と銀行から出発する」も、ト文にもカラ文にもなり得る。ただ、文A₁がニ文となるようX・Yが定まっている時、文A₂はカラ文である。且つ文A₁とA₂は、属する文型以外に形式上の違いを持っておらず、述部・名詞句・(特に動詞述語文の場合)文の自他が全て一致する。このことを「文A₁とA₂は対応する」「文A₁と対応するカラ文は文A₂である」「文A₂と対応するニ文は文A₁である」などということにする。

3章・4章では、対応する等位文・ト文・ニ文・カラ文について、文の[対称性]を比較し、文型の違いが文の[対称性]に及ぼす影響を中心に考察を進める。その際、たとえば等位文とト文を比較する際には、等位文だけに可能で、ト文には不可能な事態表現は、あらかじめ除外した上で比較にのぞむことが望ましいだろう。本章の中心的意義はここにある。以上で前置きを終える。

事態の中でX'・Y'が占め得る「等位置」を、本章ではX'とY'の緊密性の高低を基準として、7パターンに分類する。7パターンの「等位置」は、次ページの図1では(ア)~(キ)として示されている。

- b. 文型の影響についていうと、ト文は(ア)(キ)を表現し得ず、ニ文・カラ文は(イ)しか表現し得ない¹⁰⁾。X・Yの等位接続構造の末尾にトが生起しない等位文は、(ア)~(キ)を全て表現し得るが、等位接続構造の末尾にトが生起する等位文は、(ア)だけは表現し得ない。
- c. 述部の影響についていうと、述部が独吟するのような、[事態内に行い手がただ1人だけ]と明示されているもの、病気になるのような、生理的な動作を表しているもの、困るのような、外界に現れない心的動作を表しているもの場合は、(キ)しか表現し得ない。
- d. さらに述部の影響についていうと、述部が[動詞連用形+合う/合わせる]型の文¹¹⁾が表現し得る「等位置」のパターンは、(ウ)(エ)(オ)に絞られ、(カ)は表現し得ないと思われる。(現代語に関する限り)この種の文の中心的意義は各々[X'・Y'が相互に影響を与えること][X'・Y'に相互に影響を与えさせること]の表現と考えられ、これさえ表現できれば(ウ)(エ)の場合、たとえば「一郎と花子が一本の蠟燭の火を吹き消し合ったが火は結局消えなかった」のように、「X'もY'も「動詞」が表す動作の実現に未だ成功していない」という解釈も成り立ち得る。
- e. (ア)~(キ)の分類に、定延(1990,1991)で述べた「テーゼ」という考えを導入すれば、或る事態の表現として[生産的使役動詞連用形+合う]型述語(たとえばまわらせ合う)が用いられないことが説明できる。

2. 1. (ア)の「等位置」

(ア)のイメージは、下の図2に示される。図2中の太線で囲まれた領域は一つの事態を表す。X'とY'は事態を通して常に一体であり、これを図中では点線で表してある。矢印(→)は何らかの動作・状態・性質を表す(以下の図でも同様)。たとえば彼と彼女が、1通の手紙を2人で合作して私によこすという場合、彼と彼女は事態の中で、(ア)の「等位置」を占める。

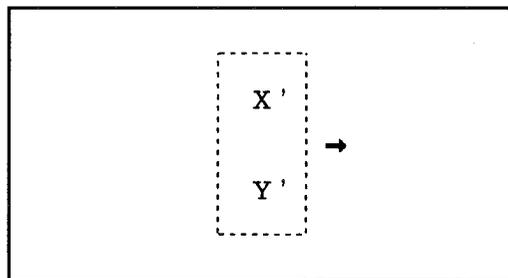


図2 : (ア)のイメージ

(ア)の「等位置」は、等位接続構造の末尾にトが生起しない等位文では表現し得るが、ト文・ニ文・カラ文・等位接続構造の末尾にトが生起する等位文では表現し得ない。これは等位接続構造末尾にトが生起しない等位文(29)では表現し得るが、末尾にトが生起する等位文(30)・ト文(31)・ニ文(32)・カラ文(33)では表現し得ない。

- (29)a. [彼と彼女]が手紙をよこす。 (30)a. [彼と彼女と]が手紙をよこす。
 b. [彼女と彼]が手紙をよこす。 b. [彼女と彼と]が手紙をよこす。
 (31)a. 彼が彼女と手紙をよこす。 (32)a. 彼が彼女に手紙をよこす。
 b. 彼女が彼と手紙をよこす。 b. 彼女が彼に手紙をよこす。
 (33)a. 彼が彼女から手紙をよこす。 (34)a. 定男が延男と映画を観る。
 b. 彼女が彼から手紙をよこす。 b. 延男が定男と映画を観る。

(29)と(30)の違いは2.8で考察する。なお前述のとおり、「等位置」のパターンは認知的なものであって、外面的な状況とは必ずしも一致しない。たとえば(34)の定男と延男がシャム双生児(従って外面的に一体)としても、(34)における両者が占める「等位置」は(ア)ではなく、後述(カ)のパターンにあたる。

2. 2. (イ)の「等位置」

(イ)のイメージは図3に示される。X'・Y'は事態を通して常に一体というわけではないが、事態は「X'の部分」「Y'の部分」に2分し難い。たとえば一郎と花子が一組の夫婦になる場合、一郎と花子は事態の中で、(イ)の「等位置」を占める。

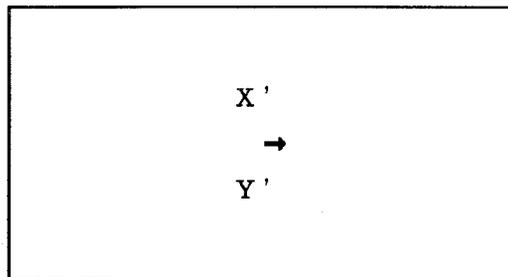


図3 : (イ)のイメージ

(イ)の「等位置」は、等位文・ト文・ニ文・カラ文の全てが表現し得る(但しニ文とカラ文のこのような事態表現は、全ての話者が認容するわけではない。例と考察は4章にまわす)。等位文(35)・ト文(36)は共にこれを表現し得る。

- (35)a. [一郎と花子(と)]が結婚する。 (36)a. 一郎が花子と結婚する。
 b. [花子と一郎(と)]が結婚する。 b. 花子が一郎と結婚する。

2. 3. (ウ)の「等位置」

(ウ)のイメージは下の図4に示される。X'が行う動作はY'やY'の一部・持ち物に向かい、Y'が行う動作の対象はX'やX'の一部・持ち物に向かっている。述部には互いに・互いの・相互に・相互の・動詞連用形+合う/合わせるなどが生起しやすい。たとえば一郎が花子に甘え、花子も一郎に甘えるという場合、一郎と花子は事態の中で、(ウ)の「等位置」を占める。

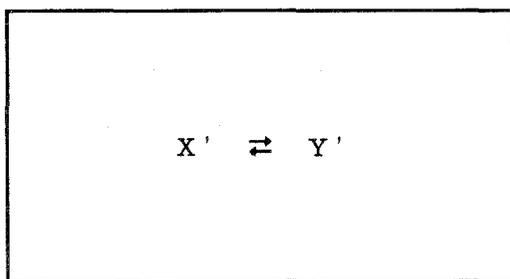


図4：(ウ)のイメージ

(ウ)の「等位置」は等位文・ト文では表現し得るが、ニ文・カラ文では表現し得ない。これは等位文(37)・ト文(38)では表現し得るが、ニ文はそもそも(39)のように、適当なト格名詞句を補って考えなければ適格性が低く、補ったところで(ウ)の「等位置」は表現し得ない。

(37)a. [一郎と花子(と)]が甘え合う。 (38)a. 一郎が花子と甘え合う。

b. [花子と一郎(と)]が甘え合う。 b. 花子が一郎と甘え合う。

(39)a. 一郎が(次郎と)花子に甘え合う。

b. 花子が(次郎と)一郎に甘え合う。

またたとえば一郎が花子から離れ、花子も一郎から離れるという場合、一郎と花子は事態の中で、(ウ)の「等位置」を占める。これは等位文(40)・ト文(41)では表現し得るが、カラ文はそもそも(42)のように、適当なト格名詞句を補って考えなければ適格性が低く、補ったところで(ウ)の「等位置」は表現し得ない。

(40)a. [一郎と花子(と)]が離れ合う。 (41)a. 一郎が花子と離れ合う。

b. [花子と一郎(と)]が離れ合う。 b. 花子が一郎と離れ合う。

(42)a. 一郎が(次郎と)花子から離れ合う。

b. 花子が(次郎と)一郎から離れ合う。

なお筆者の知る限り、これまで指摘されていないことだが、(43)(44)の後には、「しかし両者ともバックを取らせなかった」と続けることができる。このことについて若干言及したい。

- (43)a. レスリングの試合で、[一郎と次郎(と)]がバックを取り合った。
 b. レスリングの試合で、[次郎と一郎(と)]がバックを取り合った。
- (44)a. レスリングの試合で、一郎が次郎とバックを取り合った。
 b. レスリングの試合で、次郎が一郎とバックを取り合った。
- (43)(44)では、[一郎は次郎のバックを取ろうとし(=次郎の体を背後からつかもうとし)、次郎は一郎のバックを取ろうとしたが、両者とも成功しなかった]という解釈が許される。これは等位文やト文を解釈する場合、X'の動作とY'の動作が同時に実現する可能性が、優先的に追求されるという事情による。且つ、[一郎が次郎のバックを取る]ことと[次郎が一郎のバックを取る]ことは、同時には成立しないという事情にもよる。この解釈も(ウ)に含めておく。

2. 4. (I)の「等位置」

(I)のイメージは図5に示される。図中、波線で囲んだものは、X'やY'でない、動作の向かい先を表す(以下の図でも同様)。X'が行う動作も、Y'が行う動作も、そちらに向かっており、お互い(の一部・持ち物)に直接向かってはいない。だがX'とY'は、動作の向かい先をはさんで対峙しており、X'が行う動作の方向と、Y'が行う動作の方向は、相対立している。X'・Y'は、間接的に影響を及ぼし合っているといえる。たとえば彼が車を押し、彼女もその車を反対側から押すという場合、彼と彼女は事態の中で、(I)の「等位置」を占める。述部にはさし向かいで・向かい合って・動詞連用形+合う/合わせるなどが生起しやすい。

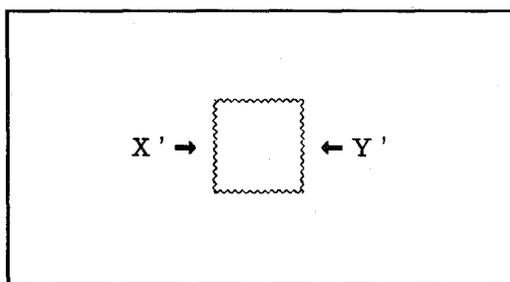


図5 : (I)のイメージ

(I)の「等位置」は等位文・ト文では表現し得るが、ニ文・カラ文では表現し得ない。これは等位文(45)・ト文(46)では表現し得るが、ニ文・カラ文では一般に適格とはならず、(ウ)の「等位置」は表現し得ない(例文省略)。

- (45)a. [彼と彼女(と)]が車を押し合う。 (46)a. 彼が彼女と車を押し合う。
 b. [彼女と彼(と)]が車を押し合う。 b. 彼女が彼と車を押し合う。

(I)も、(ウ)の場合と同様の事情を得て、X'とY'が両方とも当該動作の遂行に成功しないという解釈を許す。(47)(48)は後に「しかし火は結局消えなかった」と続けることができる。この解釈も(I)に含めておく。

(47)a. [一郎と次郎(と)]が1本の蠟燭の火を吹き消し合った。

b. [次郎と一郎(と)]が1本の蠟燭の火を吹き消し合った。

(48)a. 一郎が次郎と1本の蠟燭の火を吹き消し合った。

b. 次郎が一郎と1本の蠟燭の火を吹き消し合った。

以上のように(ウ)(I)の場合、「X'もY'も「動詞」が表す動作の実現に未だ成功していない」という解釈が成り立ち得る。述部が[動詞連用形+合う/合わせる]型の文の中心的意義は(少なくとも現代語に関する限り)、[X'・Y'が相互に影響を及ぼすこと]の表現と考えられ、これさえ表現できれば上記の解釈も差し支えないと思われる。

2. 5. (オ)の「等位置」

(オ)のイメージは図6に示される。X'とY'の動作は、間接的には互いの方向に向かい、相互に影響を及ぼし合っている。しかし外面的に見る限り、X'やY'が行う動作は、向かい先を持つ場合でも、その向かい先はお互いではないし、両者は対峙してもいない。たとえばパンチ力の強さを誇る猛者Aが、やはりパンチ力の強さを誇る猛者Bと優劣を決することになり、Aが一台のパンチ力測定機を殴って、「チャンピオン級」を証明する鐘を鳴らせば、Bも負けじと測定機を殴って鐘を慣らし、再びAが鐘を鳴らせばBも鐘を鳴らす、という場合、AとBは事態の中で、(オ)の「等位置」を占める。

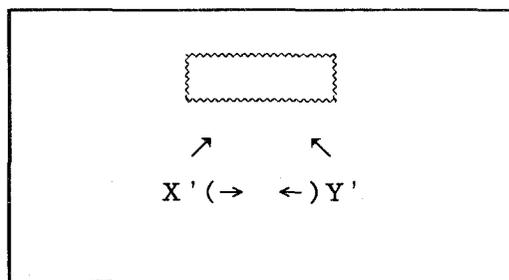


図6：(オ)のイメージ

また図6では、動作が外面的な向かい先を持っており、且つその向かい先が一致しているが、これは(オ)のパターンにとって義務的な事情ではない。上の場合、用いられる測定機(そして鐘)は、A・B間で一致していてもいなくてもよい。述部には動詞連用形+合う/合わせるなどが生起しやすい。

(オ)の「等位置」は、等位文・ト文では表現し得るが、ニ文・カラ文では表現し得ない。等位文(49)・ト文(50)は共にこれを表現し得る。また我慢大会でAが我慢すればBも負けじと我慢するという場合、等位文(51)・ト文(52)は共にこれを表現し得る。この場合、動作の外面的な向かい先はない。ちなみにニ文はそもそも(53)のように、適当なト格名詞句を補って考えなければ適格性が低く、補ったところでAとBの「等位置」は表現し得ない。カラ文も同様である。(54)を参照(対応する等位文・ト文は省略)。

- (49)a. [AとB(と)]が鐘を鳴らし合う。 (50)a. AがBと鐘を鳴らし合う。
 b. [BとA(と)]が鐘を鳴らし合う。 b. BがAと鐘を鳴らし合う。
 (51)a. [AとB(と)]が我慢し合う。 (51)a. AがBと我慢し合う。
 b. [BとA(と)]が我慢し合う。 b. BがAと我慢し合う。
 (53)a. Aが(Cと)Bに我慢し合う。 (54)a. Aが(Cと)Bから学習し合う。
 b. Bが(Cと)Aに我慢し合う。 b. Bが(Cと)Aから学習し合う。

2. 6. (カ)の「等位置」

(カ)のイメージは図7に示される。X'の動作とY'の動作は間接的にも相対立しない。動作に向かい先がある場合、それは共通しており、X'とY'の動作は並行している。相互的な影響の及ぼし合いはない。たとえば2人で英語の勉強会を作った彼と彼女が、一緒に英語を学ぶという場合、彼と彼女は事態の中で、(カ)の「等位置」を占める。

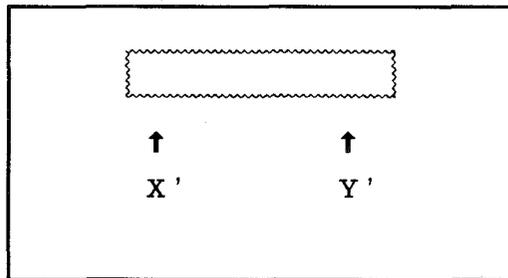


図7：(カ)のイメージ

(カ)の「等位置」は、等位文・ト文では表現し得るがニ文・カラ文では表現し得ない。等位文(55)・ト文(56)は共にこれを表し得るが、ニ文(57)・カラ文(58)はこれを表し得ない。

- (55)a. [彼と彼女(と)]が英語を学ぶ。 (56)a. 彼が彼女と英語を学ぶ。
 b. [彼女と彼(と)]が英語を学ぶ。 b. 彼女が彼と英語を学ぶ。
 (57)a. 彼が彼女に英語を学ぶ。 (58)a. 彼が彼女から英語を学ぶ。

b. 彼女が彼に英語を学ぶ。

b. 彼女が彼から英語を学ぶ。

述部が[動詞連用形+合う/合わせる]型の文を記述した姫野(1982)では、この述部が意味する動作として、「共同動作」という一範ちゅうが設けられている。この「共同動作」は、(エ)(オ)(カ)にまたがっているが、(少なくとも現代語に関する限り)(エ)(オ)と違って(カ)のパターンの表現は難しいのではないか。

たとえば(45)(46)は、一台の車を互いに反対側から押す事態を表現し得るが、彼と彼女が協力して同時に同方向に押す(カ)の事態は表現しない。もしも同方向に押す事態を表現するとすれば、それはたとえば、車を押すことが体力の誇示を意味するような状況下、お互いに負けじと押すという場合である。この場合は彼と彼女の「等位置」は前述(オ)であって、(カ)ではない。このことは、次のように考えれば納得できる。

(45)a. [彼と彼女(と)]が車を押し合う。 (46)a. 彼が彼女と車を押し合う。

b. [彼女と彼(と)]が車を押し合う。 b. 彼女が彼と車を押し合う。

述部が[動詞連用形+合う/合わせる]型の文では、X'・Y'の相互的な影響の及ぼし合いが必須の中心的意義である。ところで「X'とY'の相互的な影響の及ぼし合い」は、X'とY'が対峙し(つまり文字通り「合い」)、動作の方向が対立していれば認知されやすい。逆にX'とY'が横に並び、動作の方向が並行していれば認知され難い。従って(45)(46)を耳にした時、真っ先に浮かぶのはX'とY'が向かい合い、お互いに反対側から押すという情景である。X'とY'が横に並び、同方向に車を押す情景は優先的には浮かばない。が、たとえばX'とY'の心理的な応酬(すなわち心理的対峙)を想定すれば、そのような情景の想起も不可能ではない。

たしかに、動作の方向といった概念は、多分に認知的で、常に明確とは限らないものといわざるを得ない。しかし、もしも(59a)(59b)に挙げた観察が正しいものなら、(59)は何らかの方法で説明されなければならない。[顔をしかめる][もがき合う]などといった動作にまで、方向を認めるといったやり方は、方向認定の定式化が困難という欠点はあるが、少なくとも(59)を説明し得る手段の1つではあるだろう。

(59)a. (60)(61)を聞いて[一郎と花子の視線が合っていない情景]を、少なくとも真っ先には想起し難いこと。

b. (62)(63)を聞いて[一郎と花子が同じ方向を向いて床に寝かされている情景]を、少なくとも真っ先には想起し難いこと。

(60) [一郎と花子(と)]が顔をしかめ合う。

(61) 一郎が花子と顔をしかめ合う。

(62) 室内に毒ガスを注入されて[一郎と花子(と)]がもがき合う。

(63) 室内に毒ガスを注入されて一郎が花子ともがき合う。

(64)(65)は通常、AとBが木をはさんで両側からもたれるという事態を表現する。

たとえその木が大木で、余地が十分あったとしても、AとBが並んでもたれるという事態は表現しない。(64)(65)では、動作方向はA・Bそれぞれの背面方向であり、その点で両者が「対峙」しているとはいえないが、動作の方向が対立し、相互的な影響の及ぼし合いがあると認めることは、さほど不自然ではないと思うが、どうだろうか。

(64)a. [AとB(と)]が1本の木にもたれ合う。

b. [BとA(と)]が1本の木にもたれ合う。

(65)a. AがBと1本の木にもたれ合う。

b. BがAと1本の木にもたれ合う。

次に、述部が[動詞連用形+合う/合わせる]型でない文が(カ)の「等位置」を表現する可能性について考えたい。述部が1人でしかできない(66)のような動作を表す場合、表現できる「等位置」のパターンは後述(キ)しかないが、(キ)はト文では表現できないので(67)の適格性は低い。

(66)a. 「1人」と明示的に指定された動作……………例.独吟すること

b. 生理的な動作……………例.病気になること

c. 心理的で、外界に必ずしも現れない動作……………例.困ること

(67)a. *彼が彼女と独吟する。

b. *一郎が花子と病気になる。

c. *一郎が花子と困る。

(67c)に対して(68)の適格性が高いのは、テイル形の困っているが、単なる困惑を表すことの他に、たとえば苦情をいい合う、善後策を相談するといった、外界への現れがある動作を表すことがあるからで、(68)の困っているは、この後者の意味で解釈することができる。対して困るはこの意味を持っていない¹²⁾。

(68) 工具が無ければ仕事ができない、どうしたらいいだろうと、田中と困っているところへ三浦が現れた。

2. 7. (キ)の「等位置」

本章で観察しているX'とY'との「等位置」は前述(19)の通り、事態の中で問われるものであるから、別々の事態に属しているX'とY'は、そもそも問題外とすることが正しいかもしれない。

(19) 2個の事態構成物を、「事態の中で等位置を占める均質なもの」として、文(または文の一部)がとらえようとする力の度合を、その2個の事態構成物に対する、文(または文の一部)の[対称性]とする。

しかし、少なくとも何らかの表現形式が2個の事態表現を結んでいる場合は、2個の事態から構成される1個の上位事態が想定できるから、事態の中での「等位置」

の内容を問うことも、さほど無理とは思われない。本稿ではこうした考えに基づき(キ)を設けておく。(キ)のイメージは、下の図8に示される。X'とY'は、異なる事態で似通った動作を行う。図8中の二重線は、何らかの要素によって2個の事態が結ばれていることを表す。

たとえばA国対C国の戦争が今年1月に勃発して終結し、B国対C国の戦争が今年6月に勃発して終結したとする。2つの戦争の間には何の因果関係もなく、A国-B国間には、軍事同盟及びそれに類するものは何ら結ばれていなかった。このような場合、(少なくとも、何らかの要素が2個の事態を結べば)A国とB国は、(キ)の「等位置」を占める。

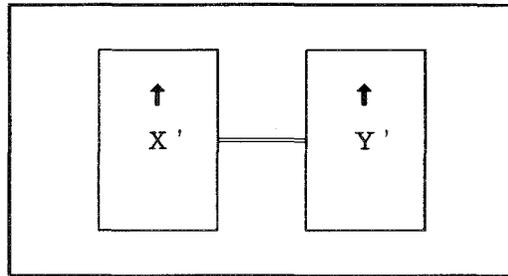


図8：(キ)のイメージ

(キ)の「等位置」は、等位文では表現し得るが、ト文・ニ文・カラ文では表現し得ない。特に等位文とト文について上の例でいえば、(68)はこれを表現し得るが、(69)は表現し得ない。

- (68)a. 今年の上半期には、[A国とB国(と)]がああ戦法で戦った。
 b. 今年の上半期には、[B国とA国(と)]がああ戦法で戦った。
- (69)a. 今年の上半期には、A国がB国とああ戦法で戦った。
 b. 今年の上半期には、B国がA国とああ戦法で戦った。

文の[対称性]の高低は、2個の事態表現を結ぶ表現形式に影響される。あの戦法での場合、文の[対称性]は高く、(68a)(68b)の同義性は高い。接尾辞どうしの場合も、(70)のように同様である。対してこの順の場合、文の[対称性]は低い。(71)を参照。

- (70)a. [彼と彼女(と)]がイタリア人どうしだ。
 b. [彼女と彼(と)]がイタリア人どうしだ。
- (71)a. 今年の上半期には、[A国とB国(と)]がこの順で戦った。
 b. 今年の上半期には、[B国とA国(と)]がこの順で戦った。

2. 8. まとめと補足

本章の観察結果は、本章のはじめに(28)として述べておいた。(28)を再掲する。

- (28)a. [文がどのような「等位置」のパターンを表現し得るか]には、[その文がどの文型に属するか]や[その文の述部がどのようなものか]などが影響する。
- b. 文型の影響についていうと、ト文は(ア)(キ)を表現し得ず、ニ文・カラ文は(イ)しか表現し得ない¹⁰⁾。X・Yの等位接続構造の末尾にトが生起しない等位文は、(ア)～(キ)を全て表現し得るが、等位接続構造の末尾にトが生起する等位文は、(ア)だけは表現し得ない。
- c. 述部の影響についていうと、述部が独吟するのような、[事態内に行い手がただ1人だけ]と明示されているもの、病気になるのような、生理的な動作を表しているもの、困るのような、外界に現れない心的動作を表しているもの場合は、(キ)しか表現し得ない。
- d. さらに述部の影響についていうと、述部が[動詞連用形+合う/合わせる]型の文¹¹⁾が表現し得る「等位置」のパターンは、(ウ)(エ)(オ)に絞られ、(カ)は表現し得ないと思われる。(現代語に関する限り)この種の文の中心的意義は各々[X'・Y'が相互に影響を与えること][X'・Y'に相互に影響を与えさせること]の表現と考えられ、これさえ表現できれば(ウ)(エ)の場合、たとえば「一郎と花子が一本の蠟燭の火を吹き消し合ったが火は結局消えなかった」のように、「X'もY'も「動詞」が表す動作の実現に未だ成功していない」という解釈も成り立ち得る。
- e. (ア)～(キ)の分類に、定延(1990,1991)で述べた「テーゼ」という考えを導入すれば、或る事態の表現として[生産的使役動詞連用形+合う]型述語(たとえばまわらせ合う)が用いられないことが説明できる。

(ア)～(キ)を順に観察する過程で、(28)に挙げた観察結果は、(28e)以外全て述べることができた。この節では観察結果を文型を中心にまとめ、最後に(28e)を説明する。

まず、これまでの観察をまとめると、次ページの表1を得る。表1は、どの文型に属する文が、どの「等位置」パターンを表現し得るかを示したもので、横軸に文型、縦軸に「等位置」パターンを並べてある。表中、「末尾」とはX・Yの等位接続構造の末尾を表す。また「+」印は表現し得ることを、「-」印は表現し得ないことを表す。

表1の解釈として、(ア)と(イ)～(キ)とを分けておきたい。(ア)を除けばX'とY'の緊密性は前述のとおり、(イ)が最も高く、以下だんだんと低下して(キ)が最も低い。それに伴って、「等位置」を表現し得る文型の種類は減る。従って(76)を得る。

(76) X'・Y'の緊密性が高くなればなるほど、X'・Y'の「等位置」を表現できる文型の種類は多くなる。

(ア)の場合は、2個の事象構成物の緊密性が高すぎるがゆえに、表現者はこれらを

2個ではなく、むしろ1個の事象構成物と認知しており、従って(76)の反例ではないと考えることができる。

このように(7)の事象構成物を1個と考えれば、等位接続構造の末尾にトが生起する等位文が、(7)の「等位置」を表現し得ないことにも説明がつく。末尾にトが生起する等位接続構造は「Xと/Yと」あるいは「Yと/Xと」のように分節されやすく、それだけX'・Y'の一体性が損なわれやすいというわけである。このことは3.2でも改めて述べることになる。

緊密性 高 ←————→ 低

文型 \ 「等位置」	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)	(オ)	(カ)	(キ)
等位文(末尾トなし)	+	+	+	+	+	+	+
等位文(末尾トあり)	-	+	+	+	+	+	+
ト文	-	+	+	+	+	+	-
二文・カラ文	-	+	-	-	-	-	-

表1:文型ごとに見る、各「等位置」パターンの表現可能性

以上でまとめを終わり、最後に(28e)を説明したい。

定延(1990)では「弾当て代換」の認容に、実現対象となる事態のテーゼ性が関与することに触れた。

(72) [小学校教師の独白] あの子が今日のドッジ・ボールに絶対加わろうとしなかったのも、これまでにボールで遊んだ経験がないからだ。それであの子は、ボールを必要以上にこわがっているのだ。一度あの子を、本物のボールに当ててやる必要があるなあ。

(72)末尾の文が別に不自然ではないと判断する話者が相当数確認できる。このような事態表現の可能性は、「(72)の文脈では、あの子とボールとの衝突は教師にとって、具体的動作であるだけでなく、具体的動作の履行を通して実現されるテーゼでもあり得る」といった事情に補助されている。

このテーゼという概念を用いて定延(近刊a)では、使役形式の使い分けを説明した。たとえば(73a)(73b)のうちでは語彙的使役の表現(73a)がよく用いられ、迂言的使役

の表現(73b)はあまり用いられないが、全く、というわけではない。

(73)a. 注意書をまわす。

b. *注意書をまわらせる。 [適格性判断は青木1977による]

表現者が[注意書がまわること]をテーゼとして認知する場合には、そのテーゼを実現するという動作の表現として、(73b)を用い得る。たとえば(74)末尾においては、(a)(b)のいずれの形式も不自然ではないと判断する話者が相当数確認できる。この時(b)は「注意書がまわる」というテーゼを最終的に実現する」という、かなり抽象的な動作を表現する¹³⁾。

(74) 『ご存じのように当自動車レース同好会では、いつもレース前には注意書の回覧を行い、会員に安全運転を呼びかけています。しかし最近は注意書が、回覧途中で紛失したり、また回覧が非常に遅滞したりと、まともに機能しなくなってきています。次回のレースでは、会員の皆さんの良識に期待しております』事務局からこのような通知を受け取った会員たちは、次のレースでは、自分のところに回ってきた注意書を、迅速に次の会員に渡すよう心がけ、こうして全員一致団結して、注意書をきちんと —

a. まわした。

b. まわらせた。

さて本稿で問題にしたいのは、(74a)(74b)の述語に合うを付加できるかどうかである。結論からいえば(74a)には合うを付加してまわし合ったとできるが、(74b)はまわらせ合ったとするとかなり不自然になる。

(74a)のまわしたは、具体的な一枚の注意書に向けられた動作を表している。そして、これに合うを付けたまわし合ったは、具体的な一枚の注意書に向けられた個別的动作を会員が順々に履行する事態として、つまり会員たちが(オ)の「等位置」を占める事態として理解できる。

対して(74b)のまわらせるは、具体的な一枚の注意書に向けられた動作を表すのではなく、テーゼ[注意書がまわる]を実現するという動作を表す。このテーゼは、「注意書を(次の会員に)まわす」ことを全ての会員が履行して初めて実現される、最終的な状態といえる。従ってこの動作は、会員間で順々になされていく動作ではなく、全会員が同時に最後になしとげる動作である。この動作を行う会員間に、間接的な影響の及ぼし合いは想定できない。従って「注意書をまわらせ合う」は、会員たちが(オ)の「等位置」を占める事態として理解できない。さらに、会員たちがテーゼをはさんで対峙しているわけでもないから(I)でもない。注意書は会員の身体や持ち物でないからもちろん(ウ)でもない。[動詞連用形+合う]型述語の文による「等位置」表現可能性を(ウ)～(オ)に絞っておくと、(74b)に合うを付加できないことが以上のように説明できる。

もちろん文脈に変更を加え、[2つの自動車レース同好会があり、双方の会員どうしが、良識の高さを競い合う意識をもって、注意書の正常な回覧を実現し合う]という新しい状況を考えれば、「A同好会の会員たちとB同好会の会員たちが、注意書をまわらせ合った」という表現も悪くないかもしれない。が、その場合の「等位置」は(オ)のパターンであって、(カ)ではない。

以上で見たX'・Y'の「等位置」の7パターンを前提として、次の3章、そして4章では、文型が文の[対称性]に及ぼす影響を中心に考察を進める。対応する等位文とト文を3章で比較し、対応するト文とニ文、及び対応するト文とカラ文を4章で比較する¹⁴⁾。

3. 対応する等位文とト文の[対称性]比較

この章は、対応する等位文・ト文について、文の[対称性]を比較することを主な目的とする。2章で見た(ア)(キ)の等位置パターンは、等位文でしか表現し得ないので、ここでは考察から除いておく。等位置パターンの可能性を(イ)～(カ)と限定した上で、等位文とト文で、どちらがより、X'・Y'を等位置と捉えやすいかを考察することになる。なお、X・Yの相互交換が適格性を保存しないト文については、これまで(筆者の知る限り)記述されていないようで、3.2では特にこれを観察してみたい。

3. 1. 文の[対称性]比較

あらかじめ、本節での結論を(75)に記す。(75c)はそれ自体必然的とはいえないが、(75a)(75b)を説明する上で都合がよく、また直観にも合致すると思われ、認めておきたい。

(75)a. X・Yの相互交換は、等位文では、文の適格性を必ず保存する¹⁵⁾が、ト文では必ずしも保存しない。

b. [或る事態を表現する可能性]が、ト文ではX・Yを相互交換すると変わるのに、対応する等位文では変わらない、という場合がある。

c. 等位文は対応するト文より、文の[対称性]が高い。

まず(75a)を見る。ト文(76)(77)ではX・Yの相互交換が文の適格性を保存しない。

(76)a. 彼女が女だてらに彼と争う。 (77)a. 彼が男のくせに彼女と争う。

b. *彼女が女だてらに彼女と争う。 b. *彼女が男のくせに彼と争う。

ト文(78)(79)にも、微妙ながら同様の傾向が見てとれる。説明の都合上、対応する等位文を(80)(81)に挙げる。

(78)a. % 野菜を白味噌と和える。 (79)a. % 小麦粉を塩水と練る。

b. % 白味噌を野菜と和える。 b. % 塩水を小麦粉と練る。

(80)a. %[野菜と白味噌(と)]を和える。(81)a. %[小麦粉と塩水(と)]を練る。

b. %[白味噌と野菜(と)]を和える。 b. %[塩水と小麦粉(と)]を練る。

(78)～(81)は全て、話者間で適格性判断が高低分かれる(ここではこれを文頭の「%」印で表す)が、個々の話者ごとに見れば等位文(80)は(a)(b)間で適格性の差がない。すなわち(80a)の適格性を高いと判断する話者は(80b)の適格性をも高いと判断するし、(80a)の適格性を低いと判断する話者は(80b)の適格性をも低いと判断する。(81)も同様で、(81a)の適格性を高いと判断する話者は(81b)の適格性をも高いと判断し、(81a)の適格性を低いと判断する話者は(81b)の適格性をも低いと判断する。参考までに、(80a)に該当する実際の使用例を(82)に挙げておく¹⁶⁾。

(82) ……器に青じそを敷き、いかとうにをあえて…… [桔梗泉(編)1990

『人気おかず お弁当全集』,東京:(株)主婦と生活社,224,「いかのうにあえ」.]

対して(78)(79)の場合、(a)のみを適格とし(b)を不適格と判断する話者が確認できる。この判断は、(78a)(79a)のト格名詞句をデ格で表示した(83)(84)について、全ての話者が示す適格性判断と対応する。

(83)a. 野菜を白味噌で和える。(84)a. 小麦粉を塩水で練る。

b. *白味噌を野菜で和える。 b. *塩水を小麦粉で練る。

尤も、(78b)(79b)を適格と判断する話者も存在する。実例を(85)に挙げる。

(85)①たいのおろし身300gは皮を引いてそぎ切りにし、塩少々をふってしばらくおく。塩を洗い流して水けをふく。

②酢少々でふいてしばらくおいただし昆布50cmの上に①を並べて昆布を巻く。

1時間くらいおいてたいの昆布じめを作り、細切りにする。

③みょうが2個は1枚ずつはがしてさっと熱湯に通し、酢カップ1/2、砂糖・水各大きさ2、塩少々につけ込む。

④すぐき50gと葉少々は粗みじん切りにし、②とあえて器に盛り、③を添える。

[桔梗泉(編)1990『人気おかずお弁当全集』,東京:(株)主婦と生活社,225,「たいのすぐきあえ」.]

次に(75b)を見る。

(75b) [或る事態を表現する可能性]が、ト文ではX・Yを相互交換すると変わるのに、対応する等位文では変わらない、という場合がある。

たとえば[彼女が会見を希望しない]という客観的事情¹⁷⁾を備えた事態を表現する可能性は、(86)では(a)(b)ともないが、(88)では(a)にのみあり、(b)にはない。同様に、[彼が結婚を希望する]という客観的事情を備えた事態を表現する可能性は、(87)では(a)(b)ともないが、(89)では(a)にのみあり、(b)にはない。

(86)a. [彼と彼女(と)]が会いたがる。(87)a. [彼女と彼(と)]が渋々結婚する。

b. [彼女と彼(と)]が会いたがる。 b. [彼と彼女(と)]が渋々結婚する。

- (88)a. 彼が彼女と会いたがる。 (89)a. 彼女が彼と渋々結婚する。
b. 彼女が彼と会いたがる。 b. 彼が彼女と渋々結婚する。

たとえば[B国はこれまでに統合を経験していない]という客観的事情を備えた事態を表現する可能性は、(90)では(a)(b)ともないが、(91)では(a)にのみあり、(b)にはない。

- (90)a. [A国とB国(と)]を再統合する。 (91)a. A国をB国と再統合する。
b. [B国とA国(と)]を再統合する。 b. B国をA国と再統合する。

以上の観察から、本節では(75)を結論としておきたい。

3. 2. ト文の適格性保存について

既に3.1で一端を示したように、 $X \cdot Y$ の相互交換が適格性を保存しないト文がある。本章ではこの原因を(92)の3つに分けて考察する。以下、(a)から順に述べる。

- (92)a. 隠喩
b. 様態の指定
c. 出来事成立の結果 $X' \cdot Y'$ 間で得られる一体性

3. 2. 1. (92a):隠喩

ここで扱うのは(93)~(96)のような例である。これらの例で、 $X \cdot Y$ の相互交換は、文の適格性を保存しない。(a)が適格、(b)が不適格である。

- (93)a. 猫がボールとじゃれる。 (94)a. 彼が難問と取り組む。
b. *ボールが猫とじゃれる。 b. *難問が彼と取り組む。
(95)a. 彼が仕事と結婚する。 (96)a. 彼が研究と心中する。
b. *仕事が彼と結婚する。 b. *研究が彼と心中する。

もちろん各(b)も、瞬時に形成されては消えていく、臨時的(nonce-formational)な隠喩表現としてなら成り立つ余地が全くないとはいいい切れないが、安定した各(a)とは、やはり区別されるべきと思われる。

各(a)は文字通りには、[当該事態で X' と Y' が等位置を占めていること]を表す。例えば(93a)は文字通りには、当該事態において猫とボールが等位置を占めていると表している。それによって、まるでボールが同じ生き物であるかのようにじゃれつく猫の動作が描かれている。

3. 2. 2. (92b):様態の指定

ここで扱うのは(76)(77)のような例である。これらの例で、 $X \cdot Y$ の相互交換は、文の適格性を保存しない。

(76)a. 彼女が女だてらに彼と争う。 (77)a. 彼が男のくせに彼女と争う。

b. *彼女が女だてらに彼女と争う。 b. *彼女が男のくせに彼と争う。

次の3.2.3で扱うト文を除けば、ト文は、文が表現する事態から、ムードの指定及び様態の指定を全て削り去った事態の中でX'とY'を等位置に置く力が強い。この強さが、文が表現する事態においても持続するかどうかは、[ムードの指定及び様態の指定が、X'とY'に等しくなされるか、それとも不均等になされるか]による。(指定がなされない場合は前者に含める。) 不均等になされる場合は、指定を被るものがガ格名詞句かヲ格名詞句で、被らないものがト格名詞句で表現されるのが原則である。

たとえばX・Yの相互交換は、(97)では、表現される事態の客観的特性を保存するが、「〇〇の願望である」というムードの指定がこれに加わった(88)では、保存しない。(88a)の場合、一郎は「会う」ことを必ず願望しなければならないが、花子は必ずしも「会う」ことを願望しなくてよい。願望に関する指定を受けるのはガ格名詞句指示物の太郎で、花子ではない。(88b)はこの逆である。

(97)a. 彼が彼女と会う。 (88)a. 彼が彼女と会いたがる。

b. 彼女が彼と会う。 b. 彼女が彼と会いたがる。

これと同様に、(98)(99)が表す事態にムードや様態の指定が加わった事態を表す(89)(91)は、やはり文の[対称性]が低い。(89)ではガ格名詞句指示物のみが意図上の指定を、(91)ではヲ格名詞句指示物のみが回数上の指定を受けている。

(98)a. 彼女が彼と結婚する。 (89)a. 彼女が彼と渋々結婚する。

b. 彼が彼女と結婚する。 b. 彼が彼女と渋々結婚する。

(99)a. A国をB国と統合する。 (91)a. A国をB国と再統合する。

b. B国をA国と統合する。 b. B国をA国と再統合する。

(100)~(102)も同様である。彼と彼女は「キスする」「心中する」「つき合う」ことに関して[対称性]が高いが、「キスする意図を持っていたが結果として失敗する」「心中する意志を持っている」「つき合った結果として、それ以上つき合い続けるのに疲れる」ことが指定されるのは、(a)では彼だけ、(b)では彼女だけである。特に(102)の「疲れる」のようなものも、ここでは様態を指定する要素として扱い、中心的動作を「つき合う」としていることに注意されたい。

(100)a. 彼が彼女とキスし損なう。 (101)a. 彼が彼女と無理心中する。

b. 彼女が彼とキスし損なう。 b. 彼女が彼と無理心中する。

(102)a. 彼が彼女とつき合い疲れる。

b. 彼女が彼とつき合い疲れる。

以上で見てきた各例の述部(たとえば会いたがる・つき合い疲れる)は、形式の上でも、[対称性]の高い部分(会い・つき合い)と、ムード・様態の指定部分(たがる・疲れ

る)に2分できる。しかし他方では、[対称性]の高い部分と、ムード・様態指定部分が混然一体となり、形式上の2分が困難な例もある。以下にそれを示す。

(103)a. 一郎が花子と瓜二つだ。 (104)a. 一郎が花子と決別する。

b. 花子が一郎と瓜二つだ。 b. 花子が一郎と決別する。

(105)a. 一郎が花子と対応する¹⁸⁾。 (106)a. 一郎が花子と再婚する。

b. 花子が一郎と対応する。 b. 花子が一郎と再婚する。

たとえば一郎が花子の実子なら、(103a)と比べて(103b)は用い難い。一郎だけが別れる意志を持っていれば(104a)は用いられるが(104b)は用いられない。花子が一郎の家に来た客なら(105a)は用いられるが(105b)は用いられない。花子にとってこれが初婚なら(106a)は用いられるが(106b)は用いられない。

以上では、ムード・様態の指定を被るものがガ格名詞句で表現され、被らないものがト格名詞句で表現されるという原則が妥当する例を見た。が、これはあくまで原則にすぎない。たとえば(123a)で後述する「彼が彼女と死に別れる」では、「死ぬ」ということを様態の指定と考える限り、指定を被るものはガ格名詞句の彼ではなく、ト格名詞句の彼女である。

2章(カ)の解釈がなされる時は、X'とY'は、ムードや様態の指定を等しく被ることになる。が、その場合でもX'とY'は、[述部が表す動作の典型にどれだけ近い動作を行うか]に関して差を持つことができる。その時、典型により近い動作を行うものがガ格/ヲ格名詞句で表現される。ト格名詞句指示物は当該動作を「形だけ」「表面上」行うにすぎないことがある。たとえば花子が一郎の家庭教師ならば、通常(107a)と比べて(107b)は用い難い。

(107)a. 一郎が花子と勉強する。 (108)a. スターがスタッフ達とくつろぐ。

b. 花子が一郎と勉強する。 b. スタッフ達がスターとくつろぐ。

(109)a. 一郎が花子と遊ぶ。

b. 花子が一郎と遊ぶ。

これは勉強するという述部の典型(未知の事柄を学習するなど)に、一郎の動作がより近く、花子の動作(指導)がより遠いと考えられるからである。同様に、スターはリラックスしており、スタッフ達も表面上はそう装っているが、実はスターの機嫌をそこねないよう緊張しているという場合、(108a)と比べて(108b)は用い難い。これも「心から」くつろぐのがスターであって、スタッフ達ではないからである。ホステスの花子が業務として、客の一郎と飲み歌い笑い興じるという場合、(109a)と比べて(109b)が用い難いことも、同様である。

ムードの指定や様態の指定は、文の[対称性]を下げるか、上げも下げもしないかである。極端に下げた場合、相互交換が文の適格性を保存しない(76)(77)のようなト文が生まれる。但し、文の[対称性]をこのような程度にまで下げるのは、ムード

の指定ではなく、様態の指定であり、それも少数にとどまる¹⁹⁾。

- (76)a. 彼女が女だてらに彼と争う。 (77)a. 彼が男のくせに彼女と争う。
b. *彼女が女だてらに彼女と争う。 b. *彼女が男のくせに彼と争う。

3. 2. 3. (92c): 出来事成立の結果 X'・Y' 間で得られる一体性²⁰⁾

ここで扱うのは、(78)(79)のような例である。3.1で述べたとおり、これらは話者によっては(a)が適格で(b)は不適格である。3.2.3の考察は、このような話者の直観を対象としたものであり、全ての話者に等しく有効ではないことをまず断っておく。

- (78)a. %野菜を白味噌と和える。 (79)a. %小麦粉を塩水と練る。
b. %白味噌を野菜と和える。 b. %塩水を小麦粉と練る。

出来事成立の結果 X'・Y' が分離困難な状態(つまり一体性の高い状態)になる時、本来道具の役割を果たすものが、本来から事態の中核的要素であったものと同等に扱われてト格で表示され、ト文の適格性が動機づけられることがある。(78a)(79a)はその具体例といえる。

- (83)a. 野菜を白味噌で和える。 (84)a. 小麦粉を塩水で練る。
b. *白味噌を野菜で和える。 b. *塩水を小麦粉で練る。

(78a)が表す事態と(83a)が表す事態は、外面的には一致するが、表現者の認知が異なる。(79a)が表す事態と(84a)が表す事態も同様である。表現者が(83a)(84a)を用いるのは、白味噌や塩水を純然たる道具として認知した場合である。対して(78a)(79a)を用いるのは、白味噌や塩水を道具としてだけでなく、野菜や小麦粉と一体となるものとしても認知した場合といえる。このような時、白味噌は野菜と、そして塩水は小麦粉と同等に扱われ、(78a)(79a)の表現が動機づけられる。

以上の議論によれば、助詞トは時として、本来道具の役割を果たしている事象構成物を指示する名詞句の格形を表示する機能を担うことになるが、これはさして意外とは思われない。たとえば英語ではbyやwithが(110a)と(110b)の機能を兼任する。少なくとも他の言語では、1要素が(110b)の機能を、(110a)の機能と兼任することは、十分あるわけである²¹⁾。

- (110)a. 2つの事態構成物があり、それぞれを表す2名詞句の格形表示が、[表現者がどちらに注意を、より向けるか]によって決まる時、表現者が注意を、より向けない事態構成物を表す名詞句の格形を表示する機能

例. He is with her.

- b. 道具の役割を果たしている事態構成物を表す名詞句の格形を表示する機能

例. He draw circles with that pen.

トに(110b)の機能を担わせる X'・Y' の一体性は、(111)が満たされるほど、高く認知されやすい。

(111)a. 事態の回復可能性が低い。

b. 表現者が、事態の成立過程よりも成立結果に比重を置く。

(111a)から説明する。たとえば上述の(78a)(79a)の適格性が高く、(78b)(79b)の適格性が低いと判断する話者も、[ホウレンソウにコマをまぶして混ぜる]という出来事を(113b)が表現する可能性に関しては、否定的になりがちである。(ここではこれを文頭の「*」印で表す。)

(112) ホウレンソウをゴマで和える。 (113)*ホウレンソウをゴマと和える。

野菜を白味噌で和えると両者は混然一体となり、両者を元の状態に戻すことはかなり難しいが、ホウレンソウをゴマで和える場合、両者を元の状態に戻す(即ちゴマを一粒ずつ除去する)ことは比較的容易といった、事態の回復可能性に関する差が関与しているのではなかろうか。「庖丁を晒(さらし)で巻く」(つまり庖丁のまわりに晒を巻きつける)に対して「*庖丁を晒と巻く」がいかないことにも、これと同様の説明が考えられる。

次に(111b)を説明する。道具という役割は、事態成立の過程において果たされる役割である。従って表現者が、事態成立後の状態に比重を置けば、道具という役割は表現者の内心で過小評価され、代わって一体性が過大評価されやすくなる。たとえば(78a)よりも(114)、(79a)よりも(115)の方が、適格との判断は相対的に得られやすい。

(78)a. %野菜を白味噌と和える。

(79)a. %小麦粉を塩水と練る。

b. %白味噌を野菜と和える。

b. %塩水を小麦粉と練る。

(114)a. %野菜を白味噌と和えてある。

(115)a. %小麦粉を塩水と練ってある。

b. %白味噌を野菜と和えてある。

b. %塩水を小麦粉と練ってある。

等位文(80)(81)が話者によって適格性判断が分かれることは既に述べたが、(116)(117)のようにテアル形を用いると、適格との判断が相対的に得やすい。これも結果重視の形式のため、和えると混ぜるの類似性が強調されたものと考えられる。

(80)a. %[野菜と白味噌(と)]を和える。 (81)a. %[小麦粉と塩水(と)]を練る。

b. %[白味噌と野菜(と)]を和える。

b. %[塩水と小麦粉(と)]を練る。

(116)a. %[野菜と白味噌(と)]を和えてある。

b. %[白味噌と野菜(と)]を和えてある。

(117)a. %[小麦粉と塩水(と)]を練ってある。

b. %[塩水と小麦粉(と)]を練ってある。

なお(注16)に述べたように、(80)(81)の等位文は、等位接続構造末尾にトが生起しない方が、する方よりも話者に認容されやすい。同じことが(116)(117)にもいえる。これらは2.8に述べた考えで説明できる。つまり、トが生起する場合は「Xと/Yと」あるいは「Yと/Xと」のように分節されやすく、X'・Y'の一体性が損なわれやす

いということである。

以上では、[事態成立の結果X'・Y'が高い一体性を得ること]と、[事態成立の過程においてX'・Y'が非対称的な位置を占めること]との競合を観察し、話者によっては前者が後者を抑え、適格なト文を動機づけることを見た。詳細はつかめていないが、道具の場合以外にも、同様の説明が妥当するのではないかと思われる場合がある。

(118)a. *子供が自動ドアとはさまった。

b. %子供が、自動ドアとはさまって動けない。

(118a)よりも(118b)が適格性が高いと判断する話者が確認できる。これもまた、一体性の高さが適格性に与える影響の例ということになるのではなかろうか。

最後に、[事態成立の結果X'・Y'が高い一体性を得ないこと]と、[事態成立の過程においてX'・Y'が対称的な位置を占めること]との競合を観察し、話者によっては前者が後者を抑え、ト文の適格性を(わずかにせよ)下げられることに触れておく。たとえば(119)では、(119a)と比べて(119b)は微かながら適格性が低いようである。なおこの適格性の低さは、(119c)(119d)には見られない。(120)も同様。

(119)a. 駅は学校と近い。

(120)a. 一郎は花子と友達である。

b.(?)駅は学校と遠い。

b.(?)一郎は花子と他人である。

c. 駅は学校とは遠い。

c. 一郎は花子とは他人である。

d. 駅が学校と遠いこと

d. 一郎が花子と他人であること

4. ト文とニ文の[対称性]比較・ト文とカラ文の[対称性]比較

この章ではト文とニ文、ト文とカラ文について、文の[対称性]を比較考察する。と同時に、弾当て代換を成立させるニ文やカラ文を、正しく位置づけたい。

2章で述べたように、ニ文・カラ文は(i)以外の「等位置」を表現し得ないので、この章ではト文についても、X'・Y'が(i)の「等位置」を占める場合に限って考える。

まず、ト文とニ文の[対称性]比較を行う。あらかじめ結論を(121)に記す。(121f)は前述(75c)同様、それ自体必然的とはいえないが、(121a)~(121e)を説明する上で都合がよく、また直観にも合致すると思われ、認めておきたい。

(121)a. ニ文は、文の[対称性]が常に極めて低いかというところでもない。具体的にいうと、述部の[対称性]が非常に高い場合、X・Yの相互交換はニ文において、次の(i)~(iii)を、話者によっては全て保存することがある。この時、X'とY'が互いに似ておれば(つまり後述する、名詞句の[対称性]が高ければ)、対応する等位文・ト文でも(i)~(iii)が保存される。

(i) 文の適格性

(ii) 表現される事態の客観的事情¹⁷⁾

(iii)X'・Y'が事態において果たす役割²²⁾

- b. 述部の[対称性]が(a)の場合より少し低くても、X・Yの相互交換は等位文・ト文だけでなく、対応する二文においても上の(i)(ii)を保存し得る。但しそれはX'・Y'が互いに似ている場合に限られる。X'・Y'が互いに似ていても(iii)は保存されないが、対応する等位文やト文では保存される。
- c. 述部の[対称性]が(b)の場合より少し低くても、X・Yの相互交換は等位文・ト文だけでなく、対応する二文においても(i)を保存し得る。但しそれは(b)と同様、X'・Y'が互いに似ている場合に限られる。X'・Y'が互いに似ていても(ii)(iii)は保存されないが、対応する等位文やト文では保存される。
- d. 述部の[対称性]が(c)の場合より少し低くても、X・Yの相互交換は等位文・ト文だけでなく、対応する二文においても(i)を保存し得る。但しそれは、X'・Y'が互いに似ている場合に限られる。X'・Y'が互いに似ていても(ii)(iii)は保存されず、これは対応するト文でも同様である。しかし対応する等位文では保存される。
- e. 述部の[対称性]が(d)の場合よりさらに低い場合は、X・Yの相互交換は(i)~(iii)を全て保存しない。この時、対応する等位文・ト文は(適格であるとしても)(イ)の解釈を持たない。
- f. ト文は対応する二文より、文の[対称性]が高い。
- g. 述部の[対称性]が低く、対応する等位文やト文が(イ)の解釈を持たないにもかかわらず、X・Yの相互交換が(i)(ii)を保存する二文・カラ文がある(但し(iii)は保存しない)。これは述語句が有している2用法によるもので、文の[対称性]は見かけ上高いが、用法ごとに見れば低い。

(121)では、述部の[対称性]や述語句の[対称性]が問題になっているので、両者について説明しておく。たとえば二文におけるX・Yの相互交換(122)が文の適格性を保存しないのは、述語句浸かるがガ格名詞句指示物に対して固体であることを指定し、二格名詞句指示物に対して液体であることを指定するからである。同じく二文におけるX・Yの相互交換(123)が、表現される事態の客観的特性を保存しないのは、述語句死に別れるがガ格名詞句指示物に対して、結果として生き残ることを指定し、二格名詞句指示物に対して、結果として死ぬことを指定するからである。

(122)a. 荷物が水に浸かる。

(123)a. 彼が彼女に死に別れる。

b. 水が荷物に浸かる。

b. 彼女が彼に死に別れる。

[文が適格であるためにX'に対してなされる述語句の指定]と[文が適格であるためにY'に対してなされる述語句の指定]が均等である度合いを、X'とY'に対する述語句の[対称性]と考えれば、(122)の浸かる・(123)の死に別れるは、それぞれ[対

称性]が低い。述部とは述語句に副詞句を任意的に付加したものであるから(注1参照)、述部の[対称性]が高いとは、述語句の[対称性]が高く、且つ副詞句がその高さを低めないということである。述部や述語句の[対称性]についての説明はこれで終わり、以下(121)を順に見ていくが、(121a)の(iii)については説明は後にまわす。

まず(121a)について。相当数の話者にとって、[静止している赤玉に向かって白玉が動き、両者が衝突する]という事態は、(124a)だけでなく(124b)でも表現可能である。また相当数の話者にとって、[静止している赤玉に向かって白玉を動かし、両者を衝突させる]という事態は、(125a)だけでなく(125b)でも表現可能である。つまり(124)(125)に弾当て代換の成立を認容する話者が相当数確認できる。

- (124)a. 白玉が赤玉に当たる。 (125)a. 白玉を赤玉に当てる。
b. 赤玉が白玉に当たる。 b. 赤玉を白玉に当てる。

これらの話者にとって白玉と赤玉の相互交換は、少なくとも(121a)の(i)(ii)を保存することになる。且つ、対応する等位文・ト文においても(126)(127)のように、相互交換は(121a)の(i)(ii)を保存する。

- (126)a. [白玉と赤玉(と)]が当たる。 (127)a. 白玉が赤玉と当たる。
b. [赤玉と白玉(と)]が当たる。 b. 赤玉が白玉と当たる。

既に述べてきたように、弾当て代換の認容については、話者間の差が著しい。そしてまた、これまでに十分なデータが紹介されているともいい難い。従って、ここで弾当て代換を認容しない話者のために、(124)(125)と類似する様々な実例を挙げ、弾当て代換を認容する話者の存在について了解を得ておきたい。

(124)と類似する自動詞文の実例を(128)～(171)に、(123a)と類似する他動詞文の実例を(171)～(181)に挙げる。(但し改行については原典に忠実ではない。) これらが(121a)の例である²³⁾。

(121a) 二文は、文の[対称性]が常に極めて低いかというところでもない。具体的にいうと、述部の[対称性]が非常に高い場合、X・Yの相互交換は二文において、次の(i)～(iii)を、話者によっては全て保存することがある。この時、X'とY'が互いに似ておれば(つまり後述する、名詞句の[対称性]が高ければ)、対応する等位文・ト文でも(i)～(iii)が保存される。

- (i) 文の適格性
(ii) 表現される事態の客観的事情¹⁷⁾
(iii) X'・Y'が事態において果たす役割²²⁾

(128) クラブヘッドのフェースにボールが当たる瞬間のことをインパクトといいます。この瞬間が、打球のすべてを決定します。

[榎本七郎(監修)1991『女性のゴルフ・レッスン』,東京:ナツメ社,68.]

(129) "ダウン・ブローに打つ"といえ、ただヘッドを叩き下ろす動作をすればよ

いと思い、フェイスの真芯でボールを打つことを忘れがちです。フェイスの中心にボールが当たらなければ、なにもムリをしてターフをとることはなく、芝の抵抗を受けるだけ損をするわけです。

[今井汎1991『基本ベストゴルフ』(ゴルフのABC 改題)[7版],東京:金園社,189.]

(130) クラブ・フェイスの真芯にボールが当たることが第一。ターフの取り方が浅くても十分にバック・スピンはかかる。 [同上,193.]

(131) 逆にボールの位置が右足へ寄りすぎる²⁴⁾と、インパクトでクラブのヒールのほうにボールが当たって、とんでもないミス・ショットになる。 [同上,250.]

(132) マーティーとボールはカントリー・クラブでゴルフをしていた。きょうのマーティーはことのほか不調で全然クラブにボールが当たらない。空振りをくりかえしたあげく、腹を立てて [後略]²⁵⁾

[ラリー・ワイルド(著)・浅倉久志(訳)1986 世界のジョーク集⑤『ゴルフ・ジョーク集』,光文社文庫,東京:光文社,169.]

(133) そのとき、車の扉が手前に揺れ動いて、フィッシャーの肩にあたった。 [中略] フィッシャーは、なにやかや、文句たらたら、扉にぶつかった肩をさすっていた。 [エリック・アンブラー1962・宇野利泰(訳)1976『真昼の翳』,ハヤカワ・ミステリ文庫,東京:早川書房,284-6.]

(134) [木箱が積んである小屋での情事風景]

チャーリーはふたたび彼女にキスしはじめた。ビールの木箱の角が尻に当たるのを感じて、今度は少しおとなしくした。 [ジェフリー・アーチャー1991・永井淳(訳)1991『チェルシー・テラスへの道』(上),新潮文庫,東京:新潮社,67.]

(135) 彼を軍法会議にかけるべきだと考える者が大勢いたが、ただ一人の目撃者であるプレスコット二等兵が、味方の塹壕まであと数ヤードというところで流れ弾に当たって戦死してしまった。 [同上,424.]

(136) ダニエル・トランパーが流れ弾に当たって死ぬのは大歓迎だったが、チャーリー・トランパーには生きていてもらいたかった。

[ジェフリー・アーチャー1991・永井淳(訳)1991『チェルシー・テラスへの道』(下),新潮文庫,東京:新潮社,137-8.]

(137) ……なおも人さし指と中指を深々と差し入れてくじれば、丸い柔々した古継ぎのようなものが指先に当たり……。

[多淫山人(著)・喜多川歌麿(画)1800?『常陸帯』・佐野文哉(訳)1990『浮世のおんな』[再版],二見文庫,東京:二見書房,224.]

(138) 小島:広島市内ですか。

田口:市内、たまたま家の中にいたのでね、直接光線には当たっていない。

私の家の前で光に当たった人は重傷でした。 [小島輝正1984]

『素顔の大学教師たち—小島輝正対談授業』,神戸:神戸出版センター,10.]

(139) 一九五四年一月三〇日、アメリカのアラバマ州にすむホッジス夫人は昼食を終えた午後のひとときいつものように居間の長椅子に体を横たえて午睡をとっていた。すると、そこにバリバリドシンとすさまじい音がして、夫人はびっくり仰天してとび起きた。[中略]それからすこしして腰に痛みを感じた。[中略] イン石にぶつかってけがをしたという記録は、現在までのところこれ一つである。 [壺内宙太とスペース探査室(編)1990

『宇宙の謎 面白すぎる雑学知識』,青春BEST文庫,東京:青春出版社,120.]

(140) いずれにしても、手球に当たった的球は、手球の中央が当たったときと同じように、手球と的球の中心を結んだ方向に進みます。

[赤垣昭1991『ビリヤード入門』,東京:金園社,108-9.]

(141) インパクト impact クラブ・フェイスにボールが当たる瞬間。

[山野孝俊1988『初歩のゴルフ』,東京:西東社,221.GOLF WORDS(用語解説)]

(142) スイート・スポット Sweet spot クラブ・フェイスの芯で、ここにボールが当たったときいちばんよく飛ぶ。 [同上,223.]

(143) クラブの根元に当たると、(ボールは — 一定延注)直角に右に飛びます。

[金井清一(監修)1990『ワンポイント・ゴルフ アイアンの完全攻略』,東京:(有)土屋書店,22.(図の説明)]

(144) クラブのシャフトとヘッドの付け根あたりに(ボールが — 一定延注)当たるのが原因で、通常シャンクとかソケットとかいわれます。 [同上,22.]

(145) それがひどいときは(ボールは — 一定延注)クラブフェイスの付け根に当たり、シャンクになることもあります。 [同上,150.]

(146) シャンク クラブヘッドの柄が差し込んである部分にボールが当たること。ソケットともいう。 [同上,157.(用語解説)]

(147) つまり、理想的なポケット・ストライクとはボールが直接ヒットするのは①③⑤⑨ピンの四本だけで、他はヒットされたピンに当って倒れていくのです。 [須田開代子1990『ボウリング入門』,東京:成美堂出版,51.]

(148) そのためクラブの返りが遅れ、ヒールとシャフトのつけ根に球が当たってソケットになります。 [田原紘1987『ゴルフ ここを治したい』,ゴマポケット,東京:ごま書房,48 ショートアイアン ソケットを治したい]

(149) 素振りするとき、倍の距離を打つつもりでやるとちょうどいいのですが、そうはいっても、しっかり打てというのは、なかなかむずかしいもの。そこで、ボールがフェイスに当たる瞬間、頭をクイツと右に向けてみて下さい。

[同上,60 パター ショートパットを確実に入れたい]

(150) 勝ったほうが代表権を得るこの試合、ブラジルが1-0でリードした後半25分、

観客席から“ベンガラ(発火筒)”が投げ込まれ、これがチリのゴールキーパー、ロハスを直撃。首から肩にかけて血だらけになって倒れ込んだロハスは、チームメイトに抱きかかえられて退場。チリは全員が控え室に引きあげてしまった。そして、ブラジルの警備が不完全だったとして、FIFA(国際サッカー連盟)に「第3国での再戦」を申し入れた。これに対して、ブラジル側は「ロハスは発火筒に当たっていない。血だといわれるのは赤チンに間違いない」と、旗色が悪くなったチリ側の仕掛けだったことを主張。 [びっくりデータ情報部[編]

1991『スポーツ珍記録 ウソのような本当の話』,東京:(株)青春出版社,44-5.]

- (151) 「金メダルのために、ここまでやるの？」と世界中をあきれさせたのはソ連の近代五種選手、ボリス・オニシェンコだった。76年モントリオール大会の近代五種の2番目の競技、フェンシング(エペ)で、彼の、とんでもないインチキがバレてしまったのだ。英国のジム・フォックスとの対戦。オニシェンコが突きを入れた時、フォックスは剣に触れずに飛びさがった。それなのに、オニシェンコの突きが決まったことを示すランプがついた。 [同上,106.]
- (152) 野球で、ファウルボールを、手にしたバットに再び当てると、守備妨害をとられて、バッターはアウトになる。“二度打ち”のケースだが、これがゴルフの世紀の大舞台、1985年の全米オープン選手権の最終日(4日目)に起きた。[中略] クラブさばきの冴えを失っていた陳志忠は、ここから起死回生のミラクル・アプローチを狙ったが、ここでスウィングしたクラブにボールが二度当たってしまった²⁶⁾。たったひと振りでも、ボールがクラブに二度接触すれば²⁶⁾、2打分に数えられるため、1打分ムダ打ちになるわけだ。 [同上,121-2.]
- (153) 「OB杭などの“判定”は？」 大きな試合やプロ・トーナメントとなると2本の杭の内側からヒモを張って、そのヒモに球が触れるかどうかで判定する²⁷⁾。 [三木重信1989『図解ゴルフルール』,東京:日本文芸社,45.]
- (154) 「スイングに邪魔になる樹木を……」 林の中に打ち込むと、張り出した小枝や小さな木がクラブに触れることが多い²⁸⁾。スイングとはたいへん微妙なもので、振り上げたときに、ほんのわずかに触れるだけでも、もう正確なりズムを崩してしまいミス・ショットとなってしまう。 [同,74.]
- (155) 核物質 水に触れた²⁹⁾ [朝日新聞(関西版)1989年5月15日夕刊第一面見出し]
- (156) 松阪は起きあがった。部屋の一隅の本棚には、若いころからの読書歴を物語る書籍が、雑多に並んでいる。灯を点け、河童関係の本を捜した。[中略] 松坂の手に触れたのは、『岩手の伝説』(平野直・津軽書房刊)という本だった。 [齋藤栄1991『河童殺人事件』,光文社文庫,東京:光文社,149.]
- (157) 本官はしゃがんであたりを見回す。もうひとつの台座はばらばらに吹き飛ばされているが、穴のあいた砂袋の陰に男がひとりいる。男は砂袋にピストルを

載せ、本官を狙っている。本官はかたわらの機関銃を調べる。銃口は空のほうを向いている。装填されたきらきら光る弾帯がまだ残っている。本官は機関銃の背後にしゃがみ、グリップに手をかけて引き上げると、銃身がさっと下がってくる。本官の直前の砂袋に弾がもう一発食い込む。相手が照準に合う。本官は親指で発射ボタンをしっかりと押え、しばらく離さない。相手の砂袋は分解し、ろくでなしもばらばらになる。

[A.J.クィネル(著)1986・

大熊栄(訳)1986『サン・カルロの対決』,新潮文庫,東京:新潮社,391-2.]

(158) シャンクはネックに当たって右へ直角に近く飛び出す球だが、ビギナーの場合右へ球が押し出るのはほとんどブッシュボールである。

[山本増二郎1987『ゴルフ完全マスター』,東京:廣済堂出版,116.]

(159) ネックに当たるとシャンクになる [同上,120.図の説明]

(160) 近く立ってもクラブヘッドの先端に球が当たる

[浜仲吾1987『ゴルフ・悩んだとき読む本』,東京:(株)ナツメ社,55.見出し]

(161) 近く立ったからクラブヘッドのつけ根のほうに(ボールが一定延注)当たるとは限らない。 [同上,55.本文]

(162) 一般にクラブヘッドの先端が地面から離れ過ぎると、インパクトではクラブフェースのツケ根のほうに球が最初に当たり、フェースがかぶってフックが出やすい。 [同上,68.]

(163) 両手だけを目標方向へ突き出そうとしたり、右ヒザを目標よりも右に押し出すと、打球はクラブのネック(ツケ根)に当たって、いきなり右に飛び出すソケットか、その症状が軽ければ目標よりも右に飛ぶ。 [同上,144.]

(164) ツケ根に(ボールが一定延注)当たるとシャンクになる [同上,193.]

(165) また、アルタスメタルは、フェイスにダブルロール設計という、ひとつのロフトに対して上部と下部、それぞれに異なるロールを設け、ハーフトップ気味のボールでも浮力が得られる設計になっている。上部のスイートスポットで捕えたボールは最大の初速で飛び出し、下部に当たった場合でも比較的自然にボールが上がってくれるのである。

[『バフィ』1991年7月号,東京:(株)ソニー・マガジンズ,46.]

(166) オフセンターヒット。つまりボールがスイートスポットに当たらなかった場合、[後略] [『バフィ別冊 ゴルフクラブ・カタログ1991』東京:(株)ソニー・マガジンズ,119.]

(167) インパクトはアドレスの再現ということを考えると、インパクトでボールがヒールに当たり、スライスや引っかけが出てしまう。

[『アルバトロス・ビュー』1991年102号,東京:(株)スタジオ・シップ,6.]

(168) ヒール寄りにセットすると、スイートスポットより少しヒール寄りにボール

が当たり、クラブの機能を十分かつ正しく活用できる。 [同上,6.]

- (169) たとえば、テーブルのクロス面に、③から⑮までのボールが残っている場合、第一的球は当然③ボールになりますから、③ボールを狙ってショットします。そして、その③ボールに当たって⑩ボールがポケットに落ちた場合はセーフとなり、10点の得点と、プレイが続行できます。

[牧田尚文1989『図解 早わかりポケットビリヤード』,東京:日東書院,52-3.]

- (170) シャンク アイアンの柄のつけ根にボールが当たることをいいますが、ソケットと同じです。

[山本増二郎1990『初歩のゴルフ上達法』,東京:有紀書房,223.用語解説.]

- (171) ソケットとは、クラブ・フェイスに当たらずに、シャフトとフェイスの接合部分にボールを当てることを言います。 [同上,153.]

- (172) まず、初心者はボールを飛ばすことよりも、クラブ・フェイスにまともに当てることが肝心です。 [同上,46.]

- (173) つまり、膝の送りでボールを運ぶようなつもりでショットしておくことがコツになる。クラブ・ヘッドを打ち込む必要はない。パッティングの要領でクラブ・フェースに当てていだけでよい。手首を使わないようにするのも、ランの出やすいボールにするためだ。

[山本増二郎1987『ゴルフ完全マスター』,東京:廣済堂出版,124.]

- (174) リプレース Replace ルールにしたがってボールを元の位置に置き直すこと。プレースとは意味が違うので注意。グリーン上で(競技者によって一定延注)ほかのボールに当てられて動かされたボールはリプレースする。

[山野孝俊1988『初歩のゴルフ』,東京:西東社,228.GOLF WORDS(用語解説)]

- (175) ショートアイアンはとくにダウブローに打つことが習慣づけられているためティーショットでも同じようにショットしがちで、ボールのかなり下面をヒットするような感じになり、その分のズレが、ときにクラブの根っこにボールを当てることになってシャンクが多くなるのです。

[金井清一(監修)1990『ワンポイント・ゴルフ アイアンの完全攻略』,東京:(有)土屋書店,32.]

- (176) パターの芯は、シャフトを片手で持ってフェースにボールを当ててみるとわかる。フェースの一点にボールを当てても、シャフトに響かないところがある。それがパターの芯(スイートスポット)である。この部分でボールの芯を打つのである。³⁰⁾ [『ゴルフ・トゥデイ』1991, No.4(6月18日号)東京:日本ヴォーグ&スポーツマガジン社,37.]

- (177) 浅野ゆう子さんが川奈ホテルGCで行われたフジサンケイ・クラシックで、昨年に続きジャンボ尾崎と組んでプロアマ戦に出場した。2番ホールからスタ

ートしたが、いきなりティショットをカメラマンの列にぶち込み、「この人、お笑いの人ですか」とジャンボにからかわれる始末。でも、「いうとおりにはできないと、もう口をきいてやらないぞと脅かされましたが、実際はよく教えてくれました」とゆう子さんはジャンボを立てていた。18番ホールでは、ゆう子さんのアプローチがグリーンをはずすと、ジャンボが知らんぷりして(浅野のボールを自分の — 一定延注)足に当てグリーンオン。「オレは女性には優しいんだ」とはジャンボの弁。しかし、本番では予想外の予選落ちでガックリ。これには、ゆう子さんも自分のことのようにショックを受けていた。[同上,86.]

(178) 彼の唇に当てた彼女の唇³¹⁾は、想像どおり、記憶どおり、柔らかかった。

彼女の髪の新鮮な匂い、肌の若々しい滑らかさは、彼をいたく興奮させた。こんな興奮は、結婚前にリングと交際を始めた時以来、感じたことがなかった。車の窓ガラスを下げ、ジュディはクッションのある窓枠に後頭部をのせて、ジェフのキスを受けた。ラジオでアンディ・ウィリアムズが『酒とバラの日々』を歌っていた。そして、ドッグウッドの花の香りと、ジュディの柔らかい清潔な肌の匂いが混ざり合った。彼らは、キャンパスから一マイルほど離れた並木路に車を停めたのだった。バーを出た後、ジュディがここに導いたのである。(彼とはジェフ、彼女とはジュディを指している — 一定延注) [ケン・グリムウッド1986(著)・杉山高之(訳)1990『リプレイ』,新潮文庫,東京:新潮社,45-6.]

(179) バンカーショットは砂の爆発によってボールを出す訳だけど、その爆発のポイントは左足カートの延長線上に、ソールが砂にぶつかるポイントを持つてくること。だからボールの位置は当然左足のカートより更に左側にあることになる。ボールからソールにぶつけるポイント³²⁾までは、2センチがメド。ただし、この2センチはあくまでも目安であって、その距離は経験によって自分自身でつかむことだ。

[『ニブリック』1991年8月号,東京:日本スポーツ企画出版社,123.]

(180) 矯正法としては、ショートアイアンでハーフショットを繰り返して、フェースの芯に(ボールを — 一定延注)当てる練習がいいでしょう。 [同上,132.]

(181) インパクトの時、ボールをスイートスポットに当てる³³⁾ことが、ゴルフの絶対条件なのだから、至極、当然の理屈である。

[『アルバトロス・ビュー』1991年102号,(株)スタジオ・シップ,6.]

続いて(121b)の説明に移る。

(121b) 述部の[対称性]が(a)の場合より少し低くても、 $X \cdot Y$ の相互交換は等位文・ト文だけでなく、対応する二文においても上の(i)(ii)を保存し得る。但しそれは $X' \cdot Y'$ が互いに似ている場合に限られる。 $X' \cdot Y'$ が互いに似

ていても(iii)は保存されないが、対応する等位文やト文では保存される。

述部並行しているは、2個の事態構成物に対する指定が移動可能性の点で、以上の当たる・ぶつかるなどより相対的に不均等であり、[対称性]がやや低い。X・Yの相互交換は(182)に見られるように、(i)を保存しないこともある。(i)(ii)を保存するためには(183)のように、X'とY'とが、同じようなものである必要がある。XとYが同じようなものを指示する、同じような名詞句である度合を、名詞句の[対称性]³⁴⁾と呼ばば、述部が並行しているの場合、名詞句の[対称性]が高い時に限って(i)(ii)が保存され得るということになる。この時、対応する等位文・ト文でも(i)(ii)は(184)(185)のように保存される。これが(121b)の例である。

(182)a. タイヤの跡が海岸線に並行している。

b. *海岸線がタイヤの跡に並行している³⁵⁾。

(183)a. タイヤの跡が足跡に並行している。

b. 足跡がタイヤの跡に並行している。

(184)a. [タイヤの跡と足跡(と)]が並行している。

b. [足跡とタイヤの跡(と)]が並行している。

(185)a. タイヤの跡が足跡と並行している。

b. 足跡がタイヤの跡と並行している。

対して、(121a)の場合は(186)下線部のように、名詞句の[対称性]がかなり低くても、話者によっては(i)(ii)が保存される。この差が(121a)と(121b)の違いといえる。名詞句の[対称性]の高さに頼らずともX・Yの相互交換が(i)(ii)を保存するという事は、そもそも述部がX'・Y'を、事態の中で同じ役割を果たすものとしてとらえているのではないか — (121a)の場合に(iii)が保存され、(121b)以下の場合に(iii)が保存されないとしたのは、こう考えた結果に他ならない。

(186) 初心者の彼は大きくバック・スイングしてクラブを思い切り振ったが、途中でフォームが崩れ、クラブはボールにかすりもしなかった。ボールから十センチほど離れたところの地面がクラブに辛うじて当たり、乾いた音を立てただけだった。「何度言ったらわかるんだ。ボールをクラブに当てるんだよ。地面をクラブに当てるんじゃないんだよ」とコーチが静かに言った。

なお、(186)下線部と対応する等位文(187)(189)・ト文(188)(190)は、(186)を認容する話者にとっても適格性が低い。つまり等位文・ト文は、文の[対称性]が((121f)のとおり)二文よりも高い代わりに、文が適格である領域が二文よりも狭い。等位文やト文は、名詞句の[対称性]が高くなければ文の適格性は低い。

(187)a. ?[地面とクラブ(と)]が辛うじて当たる。

b. ?[クラブと地面(と)]が辛うじて当たる。

(188)a. ?地面がクラブと辛うじて当たる。

b. ?クラブが地面と辛うじて当たる。

(189)a. ?[地面とクラブ(と)]を当てる。 (190)a. ?地面をクラブと当てる。

b. ?[クラブと地面(と)]を当てる。 b. ?クラブを地面と当てる。

(121c)の説明に移る。

(121c) 述部の[対称性]が(b)の場合より少し低くても、 $X \cdot Y$ の相互交換は等位文・ト文だけでなく、対応する二文においても(i)を保存し得る。但しそれは(b)と同様、 $X' \cdot Y'$ が互いに似ている場合に限られる。 $X' \cdot Y'$ が互いに似ていても(ii)(iii)は保存されないが、対応する等位文やト文では保存される。

述部キスするは2個の事態構成物に対する指定が有生性の点で不均等であり、並行しているよりも[対称性]が低い。そして $X \cdot Y$ の相互交換は(191)のように、(i)を保存しないこともある。(192)のように、名詞句の[対称性]が高くなければ(i)は保存されないが、たとえ名詞句の[対称性]が(192)のように高くても(i)が保存されなくても、(ii)(iii)は保存されない。対応する等位文・ト文においては、(193)(194)のように(i)~(iii)が全て保存される。

(191)a. 彼が写真にキスする。 (192)a. 彼が彼女にキスする。

b. *写真が彼にキスする。 b. 彼女が彼にキスする。

(193)a. [彼と彼女(と)]がキスする。 (194)a. 彼が彼女とキスする。

b. [彼女と彼(と)]がキスする。 b. 彼女が彼とキスする。

(121d)の説明に移る。

(121d) 述部の[対称性]が(c)の場合より少し低くても、 $X \cdot Y$ の相互交換は等位文・ト文だけでなく、対応する二文においても(i)を保存し得る。但しそれは、 $X' \cdot Y'$ が互いに似ている場合に限られる。 $X' \cdot Y'$ が互いに似ていても(ii)(iii)は保存されず、これは対応するト文でも同様である。しかし対応する等位文では保存される。

述部キスしたがるは2個の事態構成物に対する指定が願望の点で不均等であり、キスするよりも[対称性]が低い。 $X \cdot Y$ の相互交換は(195)のように、(i)を保存しないこともある。(196)のように、名詞句の[対称性]が高くなければ(i)は保存されないが、この場合でも(ii)(iii)は保存されない。対応する等位文では(i)~(iii)が全て保存されるが、ト文は二文と同様になる。(197)(198)を参照。

(195)a. 彼が写真にキスしたがる。 (196)a. 彼が彼女にキスしたがる。

b. *写真が彼にキスしたがる。 b. 彼女が彼にキスしたがる。

- (197)a. [彼と彼女(と)]がキスしたがる。 (198)a. 彼が彼女とキスしたがる。
 b. [彼女と彼(と)]がキスしたがる。 b. 彼女が彼とキスしたがる。

(121e)の説明に移る。

- (121e) 述部の[対称性]が(d)の場合よりさらに低い場合は、X・Yの相互交換は(i)～(iii)を全て保存しない。この時、対応する等位文・ト文は(適格であるとしても)(i)の解釈を持たない。

述部浸かる・死に別れるは上述のとおり、2個の事態構成物に対する指定が相補的で共通部分がなく、キスしたがるよりも[対称性]が低い。X・Yの相互交換は(122) (123)のように、(i)～(iii)を全て保存しない。これと対応する等位文・ト文は(199)～(202)のように、2章の(i)の「等位置」を表現し得ない。

- (122)a. 荷物が水に浸かる。 (123)a. 彼が彼女に死に別れる。
 b. 水が荷物に浸かる。 b. 彼女が彼に死に別れる。
 (199)a.*[荷物と水(と)]が浸かる。 (200)a. [彼と彼女(と)]が死に別れる。
 b.*[水と荷物(と)]が浸かる。 b. [彼女と彼(と)]が死に別れる。
 (201)a.*荷物が水と浸かる。 (202)a. 彼が彼女と死に別れる。
 b.*水が荷物と浸かる。 b. 彼女が彼と死に別れる。

次に(121f)の説明に移る。

- (121f) ト文は対応する二文より、文の[対称性]が高い。

ト文は対応する二文より、文の[対称性]が高いと考えれば、以上で見た(121a)～(121e)を説明する上で都合が良く、本稿ではこれを認めておきたい。

ここで二文はひとまずおいて、カラ文について見る。

カラ文は、[対称性]が高い述部が二文の場合ほど豊富ではない。が、ト文と二文に関する以上の議論は、ト文とカラ文に関しても基本的に妥当し、ト文は対応するカラ文よりも文の[対称性]が高いと考えられる。[対称性]が高い述部の例を二、三挙げておく。話者間で認容の差が大きいのが、これらはほぼ(121b)あたりに相当すると思われる。

述部が離れているならX・Yの相互交換は、名詞句の[対称性]が高ければ等位文・ト文だけでなく、対応するカラ文においても(i)～(iii)を保存する。但し一体性が低いため、ト文は対比や連体修飾の構造が必要である。(203)～(208)を参照。

- (203)a. 犬が家から離れている。 (204)a. 学校が家から離れている。
 b.*家が犬から離れている。 b. 家が学校から離れている。

- (205)a. [学校と家(と)]が離れている。 (206)a. ?学校は家と離れている。
 b. [家と学校(と)]が離れている。 b. ?家は学校と離れている。
 (207)a. 学校は家とは離れている。 (208)a. 学校が家と離れているのが嫌だ。
 b. 家は学校とは離れている。 b. 家が学校と離れているのが嫌だ。

はずれるも同様である。本稿の冒頭でも述べたように、[わなにはさまって静止している兎がおり、わなだけが動いて兎が移動可能になる]という客観的事情を備えた事態を(210a)(210b)いずれでも指示できると判断する話者が(後者でしか指示できないと判断する話者と共に)確認できる。これらの話者にとって、述語句がはずれるの場合、X・Yの相互交換は、名詞句の[対称性]が高ければ等位文や(適当に調整された)ト文だけでなく、対応するカラ文においても(i)~(iii)を保存する。

- (209)a. *車がエンジンからはずれる。 (210)a. 兎がわなからはずれる。
 b. エンジンが車からはずれる。 b. わなが兎からはずれる。
 (211)a. [兎とわな(と)]がはずれる。 (212)a. 兎はわなとははずれたが…
 b. [わなと兎(と)]がはずれる。 b. わなは兎とははずれたが…

離れている・はずれると類似する実例を(213)に挙げておく。

- (213) 塚原喜美子の新生児は、気むずかしいところがあって、なかなか哺乳瓶の乳首に吸いついてくれない。だますようにして、気長に与えないと、必要量を飲み干してくれなかった。

今、豊島病院にいるほかの新生児は、比較のおとなしく、吉村緑の赤ん坊は、吸い終わると、もう寝こんでおり、自然に唇から乳首が離れてゆく姿は、世話をする圭子の目にも、とても可愛らしく映った。

[齋藤栄1991『河童殺人事件』,光文社文庫,東京:光文社,113.]

最後に(121g)について述べる。

- (121g) 述部の[対称性]が低く、対応する等位文やト文が(i)の解釈を持たないにもかかわらず、X・Yの相互交換が(i)(ii)を保存する二文・カラ文がある(但し(iii)は保存しない)。これは述語句が有している2用法によるもので、文の[対称性]は見かけ上高いが、用法ごとに見れば低い。

述部の[対称性]が低く、対応する等位文・ト文の適格性が低いにもかかわらずX・Yの相互交換が少なくとも(i)(ii)を保存する二文・カラ文がある。たとえば(214)下線部がハリをさしと同様、(後続文脈からしても)[静止している赤虫に向かってハリを動かし、両者を貫通させる]という事態を表現し得ると判断する話者が(表現し得ないと判断する話者と共に)確認できる。

- (182) 赤虫……体長1cmから1.2cm位で、ユスリ蚊の幼虫、つまりボウフラです。名まえの通り、全身が赤く、少し乱暴に扱おうと出血多量でノビてしま

います。使う時は、ほんの少し太陽に当てて乾燥させると、ハリにさしやすくなります。輪切りにしたダイコンやニンジンの上に赤虫を置き、プツリプツリとさすのが、なれない人へのアドバイス。

[大作芳男1985『川づり入門』,東京:梧桐書院,50.]

この時赤虫をハリにさすと対応する等位文(215)・ト文(216)は、(たとえ適格性が高いとしても)(イ)の解釈を持たない。この点で(121g)は、(121a)(121b)と大きく異なる。

(215)a. [赤虫とハリ(と)]をさす。 (216)a.(?)赤虫をハリとさす。

b. [ハリと赤虫(と)]をさす。 b.(?)ハリを赤虫とさす。

(217)も(214)と同様である。(217a)が(217b)と同様、[静止している庖丁に向かって晒(さらし)を動かし、庖丁の表面を晒で隠べいする]という事態を表現し得ると判断する読者が、(表現し得ないと判断する読者と共に)確認できる。

(217)a. 庖丁を晒に巻く。

b. 晒を庖丁に巻く。

cf. 庖丁一本、晒に巻いて……(十二村哲作詞『月の法善寺横丁』1960)

さらに例を(218)～(221)に挙げる³⁶⁾³⁷⁾。

(218)a. 杯が酒に満ちる。 (219)a. 管が莫大なゴミに詰まる。

b. 酒が杯に満ちる。 b. 莫大なゴミが管に詰まる。

(220)a. 鼠が病原菌に感染する。 (221)a. 手で目を日光から遮る。

b. 病原菌が鼠に感染する。 b. 手で日光を目から遮る。

以上の諸例は、(222)の諸特徴を持っている。

(222)a. 対応する等位文やト文が(適格であるにせよ)(イ)の「等位置」関係を表現し得ない。

b. X・Yがどのような名詞句であってもよいというわけではない。

c. ((b)であるにもかかわらず)名詞句の[対称性]が低い。

従って、これらの述語句は、2つの用法を持っていると考えておく。2つの用法が、具体的にどのような用法であるかは様々である。ここでは(218)に対象を絞って考えてみたい。

満ちるには、[中身が容器まで移動する]という移動の用法と、[容器が中身に影響される]という変化(充満)の用法がある。前者の用法によれば(b)、後者の用法によれば(a)が得られる。(223a)が(223b)に比べて相対的に不自然なのは、トクトクとが酒の移動は修飾できるが杯の変化は修飾できないからと考えられる。文の[対称性]は見かけ上高いが、用法ごとにみれば低い。

(223)a. ??杯を酒にトクトクと満たした。

b. 酒を杯にトクトクと満たした。

移動と変化は、一方が成立すれば他方も必ず一緒に成立するが、同じものではない。従ってX・Yの相互交換は、表現される事態の客観的特性(つまり(ii))は保存するが、X・Yが事態(というより部分)の中でそれぞれ果たす役割(つまり(iii))は保存しない。(b)では、ガ格名詞句の指示物が対象物の役割を、ニ格名詞句の指示物が目標/場所の役割を果たす。(a)では、ガ格名詞句の指示物は対象物の役割を果たす。ニ格名詞句の指示物は原因の役割を果たし、これはデ格でも表示できる。この点で(218)は、奥津(1981)などで考察されている、たとえば(224)のような、いわゆる「壁塗り代換」とかなり近い。

(224)a. 壁にペンキを塗る。

b. 壁をペンキで塗る。

このような満ちるに対して、当たる・ぶつかる・当てるなどは前述のとおり、話者によっては[対称性]が非常に高い。上ではこの高さを、X・Yの相互交換が(i)~(ii)を全て保存する、と表現したわけで、結局この表現によれば当たるなどはガ格名詞句指示物・ニ格名詞句指示物のいずれにもObjectiveという役割を指定する述語句ということになる。このあたり、役割や格についての議論がさらに必要だが、これは残念ながら今後の課題としたい。

5. おわりに

本稿のおもな主張は(225)にまとめられる。

- (225)a. 文の[対称性]は、「文が属する文型」「述部の[対称性]」「名詞句の[対称性]」の最低3要素に影響される。
- b. 文が2個の事象構成物のどのような等位置パターンを表現し得るかは、述部の形式・意味もさることながら、文が属する文型にも大きく影響される。[対称性]の高い文型であれば、X'・Y'の緊密性が低いパターンでも表現できる。2章の分類で具体的にいうと、等位文の表現可能性は(i)~(き)、ト文の表現可能性は(i)~(か)であり、[対称性]の低いニ文・カラ文は(i)しか表現し得ない。
- c. [動詞連用形+合う/合わせる]型述語の文が表現する等位置パターンは、(ウ)~(オ)に絞られる。
- d. 等位文は、X・Yの相互交換が(i)文の適格性、(ii)表現される事態の客観的事情、(iii)X'・Y'が事態において果たす役割、の全てを保存する。また名詞句に要求する[対称性]が高く、同じ役割を果たす名詞句どうしても、名詞句の[対称性]が低ければ、適格性の高い等位文は作れない。
- e. ト文は対応する等位文より、文の[対称性]が低い、[隠喩][様態の指定][出来事の結果の一体性]などの原因によらない限り、X・Yの相互交換は(i)

を保存する。また等位文と同様、名詞句に要求する[対称性]が高く、同じ役割を果たす名詞句どうしても、名詞句の[対称性]が低ければ、適格性の高いト文は作れない。また、等位接続構造末尾にトが生起する等位文には[一体性]が働きにくく、(7)の等位置パターンも表現し得ない。

- f. ニ文・カラ文は対応するト文より、文の[対称性]が低いが、述部の[対称性]が高ければ、話者によっては(i)~(iii)を全て保存することがある。述部の[対称性]がそれほど高くなくとも、名詞句の[対称性]が高ければ、(i)(ii)を保存することがある。述部の[対称性]がさらに低ければX・Yの相互交換は、名詞句の[対称性]が高い場合に限って、(i)のみを保存する。述部の[対称性]がさらに低ければ(i)~(iii)は全て保存されない。
- g. 述部の[対称性]が低いにもかかわらず、X・Yの相互交換が(i)(ii)を保存することがあるが、これは述語句が2用法を併有することによる。文の[対称性]は見かけ上高いが、用法ごとに見れば低い。述語句が移動の用法と変化の用法を併有すれば、いわゆる壁塗り代換と接近する。

* 本稿は、定延(1990)で提出した[対称性]という概念をさらに発展させ、文形式と[対称性]高低との対応づけをはかったものだが、あくまで大まか、且つ暫定的なものであり、今後さらに吟味を重ねたい。また本稿タイトルが定延(1990)の参考文献欄記載の形と一部異なる点、お詫び申し上げる。

(注1) 本稿では、表現形式と、表現形式に指示される事態構成物とを、下線の有無で表すことがある。その場合、たとえばクラブは名詞句だが、ゴルフクラブはゴルフ道具である。また、本稿でいう「名詞句」とは、格助詞を含まないものとする。

(注2) 定延(1990:注1)でも述べたが、筆者が注目してきた現象は、「相当数の話者にとって、[静止しているクラブに向かってボールが動き、両者が衝突する]という(珍しいが十分可能な)事態が(1b)だけでなく(1a)でも表現可能なこと」といってもさしつかえない。但しその場合、本文以下で「(1b)(2b)タイプの表現」と呼んでいるものは「(1a)(2a)タイプの表現」といい換える必要がある。

ちなみに英語では、本文(1)~(4)で紹介した現象の厳密な対応例は、現段階では見つかっていない。もっとも大塚(1970)によれば、下の①aが表現する事態を①bが表現することがあるが、筆者の現時点での調査では、こうした①bの使用文脈は詩などに限られるのであって、それ以外では①bは不適格と判断されるようである。①は、選択制限違反に基づく再解釈の問題と捉えられる可能性がある。

- ①a. He applied water to the wound. 「彼は水を傷口にそそいだ。」
b. He applied the wound to water.

(注3) 定延(1989,1990)における「事象」とは、益岡(1987)の「事象叙述」の対象だけではなく、「属性叙述」の対象にもなり得る概念である。無用の誤解を避けるため、本稿では定延(1989,1990)の「事象」を「事態」と呼び換えておく。

(注4) 定延(1989)における「述語動詞の対称性」の基本的なアイデアを、定延(1990)では発展させて、「述部の[対称性]」とした。本稿ではこれをさらに発展させて、「文の[対称性]」とする。この関係で本稿のタイトルが、定延(1990)参考文献欄記載の形と一部異なる結果となった。

(注5) 但し、辻井・山梨(1985)や山梨(1987)などは(9)の考えをとってはならず、例外となる。辻井・山梨(1985)の見解を下に引用する。

「外部世界での同義性を基準とする従来の『格』の議論は、あまりにも短絡的である。少なくとも、世界についての客観的な知識記述や人間の長期的な記憶の理論に使われる『格』と、発話者というフィルタを経た言語表現を議論する場合の『格』とは、区別して考える必要がある。後者の『格』は、[中略]発話時点での文脈、発話者の視点(現実世界での事象の把握の仕方)などとの相関によって発話時点に付与されるもの、あるいは、解釈過程からすると、文を解釈する過程で表層の言語表現に即して動的に与えられる意味的役割である。前者の格は、計算機での知識・推論処理や心理学での記憶モデルなどで議論されてきた格であり、[後略]。後者の格記述では、[中略]「太郎は風呂を水で一杯にした」「風呂が水で一杯になった」「水が風呂を一杯にした」— 定延注)の『水』は、それぞれ異なった意味的役割が与えられる。この両者の混同が、これまでの『格』に関する議論を混同させてきた原因の一つであろう。」

(注6) 厳密にはObjectiveだけでなくAgentiveも加える必要があるかもしれないが、ここでは説明が煩雑になりかねないので、Objectiveのみとした。

(注7) 参考までに(9)の問題について、現段階における筆者の見解をごく簡単に示す。筆者は、(注5)に記した辻井・山梨(1985)などとほぼ同様に、格に2種類を認めるべきで、どちらの種類も大切だと考えている。そして、文間の同義関係を捉えようとする、いわゆる深層格は、辻井・山梨(1985)でいう「前者の格」として一貫させるべきで、この深層格には[表現者の注意]は含まれないと考えている。筆者はこのような意味での深層格、たとえばObjectiveやGoalやSourceを認めるが、その代わりに、「(1)~(4)のクラブ・ボール・わな・兎がObjectiveやGoalやSourceを担う」という、(9)の直前で述べた前提は却下する。この点、定延(1989,1990)ではほとんど議論できなかったが、定延(近刊b)で詳しく述べたい。

(注8) 本稿では、述語に[ラレル・サセル・テアル・テイル・テオク・テヤル]などが任意的に付加されたものを「述語句」と呼び、述語句に副詞句が任意的に付加されたものを「述部」と呼ぶ。但し述部は、相互交換される2名詞句及び、それらに付随する助

詞を含まないとする。たとえば一度実際に当ててやるは述部だが、述語句や述語ではない。当ててやるは述部であることも、述語句であることもあるが、述語ではない。当てるは述部であることも、述語句であることも、述語であることもある。なお述語句の[対称性]・述部の[対称性]・名詞句の[対称性]は、4章で詳細が説明される。

(注9) X・Yを等位接続した文形式としては、[XトY(ト)]の他にも、たとえば以下に挙げるようなものがあるが、本稿では扱わず、「等位文」にも含めない。これらについては国広(1966)・久野(1967,1968)・森田(1988)・寺村(近刊)などを参照。

- ①[XニY] ②[XヤY] ③[XモYモ] ④[XカY(カ)]
⑤[X及ビY] ⑥[XアルイハY] ⑦[XマタハY] ⑧[XトカY(トカ)]
⑨[XダカYダカ] ⑩[XヤラYヤラ] ⑪[X・Y] ⑫[X、Y]

(注10) (28b)は等位文・ト文に関する限り、新しいものではなく、既に(たとえば久野1968bなどで)いわれていることを本稿の枠組で捉え直したものにすぎない。

(注11) 但し本稿での「動詞連用形+合う/合わせる」は、殴り合う・殴り合わせるなどの、透明性の高いものに限っており、(敵と)わたり合う・(その場に)居合わせるなどは除いている。なお本文では、述部が[動詞連用形+合わせる]型の文は、[動詞連用形+合う]型の文に準じるものとして、具体的な説明を省いていることを断っておきたい。

(注12) 金水(1989)を参照。

(注13) 筆者のいう「テーゼ」という概念は、(74)のような集団行為の文脈では、Searle(1990)の"collective intention (we-intention)"と同内容になる。たとえばフットボールの試合において競技者は、自分のチームのパス・プレイを成功させようというcollective intentionと、そのために自分は相手チームのディフェンスをブロックしようというindividual intention (I-intention)とを併有する、とSearle(1990)はいう。

(注14) 対応する二文とカラ文の[対称性]比較は、本稿では考察しない。

(注15) たとえば下の①aを自然に用いることのできる機会に比べて、①bを自然に用いることのできる機会は少ないかもしれないが、本稿ではこれを文の適格性とは切り離して考え、①aと①bは共に適格且つ(大体)同義としておく。等位接続されている要素の位置交替と、文の適格性保存及び意味保存についてはCooper & Ross(1975)、藤田(1990)などを参照。

①a. 昨日のボーリング大会は、[社長と係長]がペア・マッチで優勝した。

b. 昨日のボーリング大会は、[係長と社長]がペア・マッチで優勝した。

(注16) もちろん(82)中の等位接続構造は筆者の判断による。(80a)(80b)の適格性を高いと判断する話者は、等位文中の和えるを混ぜるとほぼ同義にとらえているよう

である。また、等位接続構造末尾にトが生起しない等位文の方が、生起する等位文より、話者に認容されやすいようだが、このことは3.2.3で考察する。

(注17) 本稿でいう「客観的事情」とは厳密な定義によるものではなく、動作の外形を構成する、比較的客観的な諸事情を漠然と指すにすぎない。

(注18) 応戦するは、(105)の応対すると少し形が似ているが、応対すると違って一方的動作を本義とする。たとえば「ミサイルで応戦したが、ミサイルは全弾ともそれて、相手国には落ちなかった」とはいえるが、「電話で応対したが、回線の故障でこちらの声は全く相手に届かなかった」とはいい難い。従って「応戦する」は「応対する」よりも[対称性]が低く、(2章の(カ)の解釈、つまりト格名詞句指示物をいわゆる共同者とする解釈を除けば)ト文が作れない。

(注19) 現段階の調査では、女だてらに・男のくせになどといった、性の指定要素に限られている。なおCooper(1976)によれば、結婚するに相当するTswana語の動詞 'nyala' や 'tsaya' が述語となる時、文の[対称性]は低い。男性を表す名詞が主語に、女性を表す名詞が目的語に来なければならず、この逆は不適格という。Givón(1976)はこの種の動詞を 'male chauvinist verbs' と呼んでいる。文化的・社会的背景などをかえりみず、動詞の本来的(?)語義から先験的に[対称性]高低を予測することの限界を示す例として興味深い。ちなみに、現代日本語では連れ添う・添い遂げるなどが、逆に female chauvinist verbs の候補に挙げられるが、「彼は20年間彼女に連れ添った」「彼は彼女に添い遂げた」などが完全に不適格といえるのかどうか、はっきりしない。

(注20) 森田(1980:328)では、格助詞トについて次の①のような説明がなされている。本稿の[対称性]は①中の「同じ立場」を、本稿の一体性は①中の「合一の立場」を、それぞれ独立させて考えたものともいえる。

- ① 個々の事物や人が互いに関係をもち、両者が同じ立場に立つことを表すときに用いる格助詞。「と」によって結び付けられる事物・人・行為などは、異なるものとして存在しながら、それぞれが「と」によって合一の立場にまとめられる。

(注21) さらに現代口語ビルマ語ではne.が(110a)(110b)に加えて名詞句接続の機能を兼任する旨、私的談話において杉山耕史氏にご教示頂いた。「.」は下降声調を表す。

(注22) ここでいう「役割」とは、文の持つ意味から、[表現者が何に注意しているか]他の微妙な意味を排除した、基本的な意味内容を規定するためのものと限定してとらえておく。従ってX・Yの相互交換が(iii)を保存するといっても、完全な同義性が得られるわけではない。

なお[表現者の注意]を捨象した結果だが、「あい方」「相手」「対称(格)」及び「共同者」などと従来呼ばれてきたものは、本稿では独立した役割と認めていない。「彼が彼女

と結婚する」と「彼女が彼と結婚する」の違いを[表現者が彼と彼女のどちらにより注意しているか]と考えることが妥当なら、一方が動作主の役割を果たし他方があい方/共同者の役割を果たすなどとする必要はない。また「彼が初婚の彼女と再婚する」でも、初婚の彼女は彼と同様、Agentiveの役割を果たす(但し再婚する自体とは関わらず、述語内に仮定される結婚する)についてのAgentive)と考えておく。いずれも1つの可能性の追求にすぎないが、本文以下では、X・Yの相互交換がト文の(iii)を保存することを場合に依りて認めるので、ここであらかじめ断っておく。

(注23) 厳密に言えば、本文に挙げているものと少し違った種類の弾当て代換も、実は存在する。それを簡単に紹介する。

たとえば既に1章で述べたように、我々は、隣のホームに停止していた列車の出発を車窓から目撃することで、静止しているはずのこちらの列車が移動し始めるかのごとく感じることもある。そして実際、下の①のような言語表現(これら自体は弾当て代換の表現ではない)を用いることがある。

① a. 車外の山々が後方へ飛び去った。

b. じつは自分がどれだけ酔っているかにルイスが気づいたのは、自宅へもどって、ガレージへはいていったときだった。[中略]なぜか方向が狂って、いきなり壁にぶつかった。片手の手のひらを刺がかすり、思わず闇のなかで、「くそっ！」と叫んだ。

[スティーヴン・キング1983・深町真理子(訳)1989『ペット・セマタリー』(上),東京:(株)文藝春秋,文春文庫,295.]

現段階の筆者は①の各表現を、表現者(体験者)の視点を不動とした、状況違反の比喩表現と考えている。このような表現は、話し手や主人公の体験を生々しく描こうとする際に有効と思われる。ここで紹介する弾当て代換は、①の表現と似た性質を持っている。例を②に挙げる。

② a. バックは自身の苦痛にもかかわらず、死力を尽くして疾走するヘドリーに、なぜか敬意を覚えた。それでもなお腕の回転をゆるめず、テープに向かって自らを駆り立てた。だが、テープは一步ごとに遠のいていくようだった。突然、ヘドリーが下がった。次の瞬間、バックはテープが胸に触れたのを感じた。[トム・マクナブ1986・飯島宏(訳)1988『速い男に賭けろ』東京:(株)文藝春秋,文春文庫,416-7.]

b. それからさらに二十分後、滑走路の二列のライトが正面からチャーリーに迫り、続いて車輪が地面に接すると同時に煙があがって、飛行機は所定のゲートまで滑走した。[ジェフリー・アーチャー1991・永井淳(訳)1991『チェルシー・テラスへの道』(下),新潮文庫,東京:新潮社,415.]

c. タラスはこの惑星の薄く冷たい大気にだまされて、降下軌道の算出を

誤り、高い峡谷の崖の内側へ入ったところで動きがとれなくなった。ポッドは予定よりも数キロ上流に落下していった。しかしもう、正確にはどこへ降りようとしているのか気にしている暇はない。地面はぐんぐん近づき、タラスは少しでも他より平坦そうな所へポッドを向けようとパラセールの操作を続けていた。〔ポール・プロイス1980・小隅黎・久志本克己(訳)1983『天国への門』,ハヤカワ文庫,東京:早川書房,309.〕

②aはゴール目のランナーの視点を不動のものとした表現で、意識もうろうとなっている状態が描かれている。もちろん現実には、テープがランナーから「遠のい」たり、突然ライバルが「下がった」りするはずはない。そしてテープが胸まで動いて「触れ」るはずもないのである。②b②cも同様である。このような種類の弾当て代換と対比すると、本文に掲載する種類の弾当て代換は、ちょうど③bや③cのような表現に似ているといえる。

③a. 前から知人が来たので、ラブホテルをやり過ごした。

b. 後から早足で駆けてくる女をやり過ごしておいて、その背中を刺した。

〔『桂米朝上方落語大全集 第2集』「宿屋仇」,東芝EMI.

(a)は枕、(b)はさわりの部分を変更した.]

c. 車のヘッドライトが通りに入ってきた。ルイスはまたしても木陰に身をひそめ、それをやりすごそうとした。

〔スティーヴン・キング1983・深町眞理子(訳)1989『ベット・セマタリー』

(下),文春文庫,東京:(株)文藝春秋,188.〕

物理的動静をいえば、③aでは表現者(ないし主人公)が移動しており、ラブホテルは静止している。逆に③bや③cでは、表現者(ないし主人公)は静止(あるいは相対的に遅い移動を)しており、女や車の方が(相対的に速い)移動をしている。だが①の場合と異なり、③aと③b③cとのうち、いずれか(おそらくは③b③c)について特に修辭的效果が感じられるというわけでもない。かなり雑な表現になるが、やりすごすという述語は、「自分との距離が縮小しつつあるものに対し、積極的行為を取ってしかけず、距離がゼロ(付近)を経て再び増大するにまかせる」などといった形で意味をまとめることができるのではないか。つまりやりすごすは、①②で述べた、表現者絶対本位の視点が文法化を見たものと考えられるのではないか。修辭的效果が感じられないのもそのためではないか。本文中に挙げるデータは、たとえばゴルフ技術指導書からのものなど、修辭的效果を狙った文章とはどうしても思えず、②とは別種の弾当て代換と考えるに到った。

但し、だからといって、2種の弾当て代換が互いに全く異質な別ものというわけではない。上のゴルフ指導書からのデータのように、もっぱら一方の種類に属するとしか考え難いデータもあるが、いずれの種類に属するのか決めかねる、④のよう

なデータもあり、むしろ両者は連続的な存在をなすと思われる。たとえば④aは、その日の昼間に死んだはずのパスコーを、なぜか自分は追いかけて真夜中に1人で山を登っているという、悪夢的体験を描いた表現である。物理的に見れば「あるかなきかの夜風」にそよぐ草よりも、山道を登る足の方が、移動速度が速いことはいうまでもない。まともに考えれば本文で示した種類の弾当て代換表現だが、おどろおどろしい真夜中の山の印象を、修辭的に描いた②のような弾当て代換表現でないともいい切れないように思え、結局いずれの種類の弾当て代換表現とも決めかねる。④bは死んだ息子の死体を得ようと夜中の墓地へ入り込んだところ、パトカーに見つかりそうになる場面である。上述③cのデータと同じ資料から採集したもので、③cのデータの直後に出現していることから、③cと同種と考えてもよさそうにも思えるが、やはり墓地の森の怪しげな様子を描いたものとも思われ、これも④aと同じく、いずれの種に属すとも決めかねている。

- ④a. そしてこういう考えが頭のなかを駆けめぐっているあいだにも、ルイスの足はひきずられるように脇道のほうへ向かっていた――前方に行く短パンを頼りに。月の光のなかで、パスコーの顔の乾いた血とおなじく海老茶色に見えるパンツ。

こんな夢はいやだ。そうだと、好きなやつなどいるものか。あまりになまなましすぎる。フットラグの冷たい感触、納屋のドアを通り抜けられなかったこと――ちゃんとした夢のなかでなら、ドアでも壁でもらくに通り抜けられるはずだし、またそうあるべきなのに……そしていまはまた、裸足の足に触れる冷たい草の露、体に感じるあるかなきかの夜風。その体は、いつものジョッキーマスター・シューズのほか、なにもまとっていない。 [スティーヴン・キング1983・深町眞理子(訳)1989『ペット・セマタリー』(上),東京:(株)文藝春秋,文春文庫,144.]

- b. ざらざらの樹皮が頬に触れるのを感じながら、ぴったり木に身を寄せて、それが自分を隠してくれるほど太いことを必死に願った。

[スティーヴン・キング1983・深町眞理子(訳)1989『ペット・セマタリー』(下),東京:(株)文藝春秋,文春文庫,189.]

(注24) (131)はゴルフの指導書からの引用で、上り坂にボールがある場合におかしがちなミス・ショットを指摘したものである。つまり、既に静止しているボールに対して、どのような足の構えをした場合にミス・ショットが生まれるかを述べている。従って「物理的」に言えば、「右足がボールの位置へ寄りすぎる」というわけである。本稿では「XガYニP。」型の文つまりニ文は扱うが、「XガYへP。」型の文は扱っていないので、(131)の前半部をここでの正規の例とするわけにはいかないが、関連する例であることは確かと思われる。さらに、次の①のような類例も見つかってい

る。①a①bの各状況では、ボールは手に持って動かさないはずだが、「置く」「合わせる」対象として表現されている。

①a. [アプローチ・ショットの項]

高い球を打つときは、ボールを左足寄りに置く。

[山野孝俊1988『初歩のゴルフ』,東京:西東社,156.]

b. [ランニング・ショットの項]

ボールをヒール寄りではなく、トー寄りに合わせる。

[浜仲吾1987『ゴルフ・悩んだとき読む本』,東京:(株)ナツメ社,140.]

(注25) (132)はジョークから採集したが、掲載した部分では、ジョーク的要素はないことを念のために断っておく。つまり、実は、ボールを手に握って、静止しているクラブめがけて振り当てようとしている、などといった解釈がなされるわけではない。

(注26) 少なくとも最初の接触においては、ボールは静止しているはずである。

(注27) 地面に落ちているボールがOB(規定領域外)かどうかを判定する手段を説明している。当然ながらボールは静止している。

(注28) 林の中にボールを打ち込むと、今度はそこからボールを打たなければならず、打とうとしてスイングすると、クラブが枝や木に接触しがちだ、ということの表現。

(注29) 記事内容は、核装置が海中で破損し内部が侵水、と読める。

(注30) 片手でバターを持って、地面に静止しているボールを打つ場合、バターの芯でボールをとらえれば手応えがない、ということ。ボールを手に持ち、もう片手で固定したバターのフェースに対してボールを当てるわけではない。

(注31) 明言されてはいないが、彼と彼女が行ったキスは、おそらく(178)全体で1回ではないかと思われ、ここではその解釈に立って例として挙げた。彼女(ジュディ)は「窓枠に後頭部をのせて」キスを受けたわけで、彼の唇が移動してきたのだと考えられる。

(注32) ソールとはクラブの底を指す。2センチというのは、ボールからポイントまでの距離である。何のポイントかといえば、クラブを振って、底つまりソールをぶつける地面のポイントである。

(注33) 一般に、名詞句の相互交換という操作で結ばれる2文の同義性を比較する場合、語順の影響を無視することになりかねないことは認めておきたい。しかし少なくとも本文で問題にしている種類の弾当て代換に関する限り、語順はさほど関与しないといえるようである。たとえば(146)(176)のように二格名詞句が先行する形も、(149)(181)のようにヲ格名詞句が先行する形も存在する。

(注34) XとYが「同じようなものを指示する」度合だけにとどまらず、「同じような名詞句」である度合も、文の[対称性]に関わってくる。たとえば次の①a②aは、文の

[対称性]の高低が異なる。②aの彼と違って②bの彼は、一郎を指すとは考え難く、一郎と花子に対する①aの[対称性]は、②aの[対称性]より高い。久野(1978)を参照。このように「表現形式として同じような名詞句」である度合も、広義での名詞句の[対称性]に含めておく。

- ①a. 一郎が花子と争う。 ②a. 一郎が彼の妻と争う。
b. 花子が一郎と争う。 b. 彼の妻が一郎と争う。

(注35) 尤も、問題にされている海岸線とタイヤ跡が、共にごく短い距離の場合は(182b)の適格性は高い。その場合、海岸線とタイヤの跡の[対称性]は高い。

(注36) 但し(218a)(219a)(221b)は、不適格と判断する話者も存在する。ちなみに(218)については、①のような中国語の類例が確認できる。

- ①a. 酒倒満酒杯。「杯が酒に満ちている。」
b. 酒杯倒満酒。「酒が杯に満ちている。」

また(221b)については下の②のような実例が見つかっている。

- ② ランサムは、手で日光を目から遮って、もの音ひとつしない河岸を眺めた。
[J.G.バラード(著)1964・中村保男(訳)1970『燃える世界』,創元推理文庫,
東京:創元社,9.]

(221)の他にカラ文の適例が現時点で見あたらず、そもそもカラ文は(121g)に該当しないとする可能性もあるかもしれないが、本稿ではひとまずカラ文を二文と同等に扱っておく。

(注37) 以下①～⑧のような名詞句の相互交換も、弾当て代換ではないが、何らかの文意を保存するようであり、今後検討したい。

- ①a. 彼を目にとめる。 ②a. 魔法を彼にかける。
b. 目を彼にとめる。 b. 彼を魔法にかける。
③a. 解答が彼に察しがつく。 ④a. 彼が人望に欠ける。
b. 彼が解答に察しがつく。 b. 人望が彼に欠ける。
⑤a. 友人が芸能人にいる。 ⑥a. 日本が天然資源に乏しい。
b. 芸能人が友人にいる。 b. 天然資源が日本に乏しい。
⑦a. 授賞者がアメリカ人に多い。 ⑧a. 本書が南北問題に詳しい。
b. アメリカ人が授賞者に多い。 b. 南北問題が本書に詳しい。

[参考文献]

青木伶子(1977)「使役-自動詞・他動詞との関わりにおいて-」『成蹊国文』10, 26-39.

井上和子(1976)『変形文法と日本語』(下),29-39. 東京:大修館書店.

大塚高信(編)(1970)『新英文法辞典』[改訂増補版],503. 東京:三省堂.

- 奥津敬一郎 (1967) 「対称関係構造とその転形」 『日本語研究』, 1-21. ICU日本語研究室.
- _____ (1975) 「「太郎は花子と結婚している」ならば「花子は太郎と結婚している」」新・日本語講座2『日本文法の見えてくる本』, 165-79. 京都: 汐文社.
- _____ (1981) 「移動変化動詞文-いわゆる spray paint hypallage について-」『国語学』127, 48-60.
- 金水敏 (1989) 「「報告」についての覚書」 仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』, 121-9. 東京: くろしお出版.
- 金田一春彦 (1982) 「誰かがジープにぶつかった。」 『金田一春彦・日本語セミナー1 日本語とは』, 267-8. 東京: 筑摩書房.
- 国広哲弥 (1966) 「英語『動詞+目的語』構文の分析」 『意味の諸相』(1970), 149-72. 東京: 三省堂.
- _____ (1967) 「'And' と「と・に・や・も」-日英両語語彙の比較-」 『言語研究』50, 34-49.
- 久野暲 (1967) 「ANDと「ト・ニ・ヤ」1 変換文法理論による分析」 『ことばの宇宙』12月号, 44-63, 86. 東京: テック言語教育事業グループ.
- _____ (1968a) 「ANDと「ト・ニ・ヤ」2 変換文法理論による分析」 『ことばの宇宙』1月号, 58-72. 東京: テック言語教育事業グループ.
- _____ (1968b) 「ANDと「ト・ニ・ヤ」3 変換文法理論による分析」 『ことばの宇宙』2月号, 54-67. 東京: テック言語教育事業グループ.
- _____ (1973) 『日本文法研究』, 61-75. 東京: 大修館書店.
- _____ (1978) 『談話の文法』, 134-6. 東京: 大修館書店.
- 定延利之 (1989) 「日本語における格形の相互交換について-「弾ヲ人形ニ当てる」「人形ヲ弾ニ当てる」等の表現をめぐる-」 京都大学修士論文.
- _____ (1990) 「移動を表す日本語動詞述語文の格形表示と、名詞句指示物間の動静関係」 『言語研究』98, 46-65.
- _____ (近刊a) 「SASEと間接性」 仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』, 東京: くろしお出版.
- _____ (近刊b) 「文の同義性と深層格 - 名詞句の相互交換を中心に -」 『近代』71号 (神戸大学教養部)
- 武市恵美子 (1979) 「連用成分「-ト」の構文論的考察」 『国語学』116, 86-98.
- 塚本秀樹 (1987) 「日本語における複合動詞と格支配」 『言語学の視界』, 127-44. 小泉保教授還暦記念論文集編集委員会.
- 辻井潤一・山梨正明 (1985) 「格とその認定基準」 『自然言語処理』52-3, 1-7.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味』 I, 87-101. 東京: くろしお出版.

- _____ (近刊) 『日本語のシンタクスと意味』 III, 198-213. 東京:くろしお出版.
- 成田徹男 (1988a) 「数量詞と日本語の数量表現」 『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究-9 - IPAL(Basic Verbs)をめぐる-』, 55-77. 情報処理振興事業協会.
- _____ (1988b) 「日本語の動詞と格の数量的性質」 『論集 ことば』, 173-84. 『論集ことば』刊行会.
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 (国立国語研究所報告44) 東京:秀英出版.
- 仁田義雄 (1974) 「対称動詞(Symmetrical Verb)と半対称動詞(Meso-symmetrical Verb)と非対称動詞(Anti-symmetrical Verb) -格成分形成規則のために-」 『国語学研究』 13, 56-68. 東北大学文学部「国語学研究」刊行会.
- _____ (1980) 『語彙論的統語論』. 東京:明治書院.
- _____ (1986) 「格体制と動詞のタイプ」 『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』 7, 103-213.
- 姫野昌子 (1982) 「対称関係を表す複合動詞-「～あう」と「～あわせる」をめぐる-」 『日本語学校論集』 9, 17-51. 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校.
- 藤田保幸 (1990) 「項目列記の「～ト」表現について」 『詞林』 8, 60-74. 大阪大学古代中世文学研究会.
- 益岡隆志・田窪行則 (1989) 『基礎日本語文法』. 東京:くろしお出版.
- 松村明(編) (1971) 『日本文法大辞典』, 538-9. 東京:明治書院.
- 宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』 (国立国語研究所報告43) 東京:秀英出版.
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語』 2, 328-31. 東京:角川書店.
- _____ (1988) 『日本語の類意表現』, 278-85, 324-40, 388-403. 東京:創拓社.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』, 133-7. 東京:明治書院.
- 安井泉 (1984) 「The steamer collided with the tanker」 『言語』 13-10, 82-3. 東京:大修館書店.
- 山梨正明 (1979) 「言語理論から見た意味表現」 『情報処理』 20-10, 873-9. 情報処理学会.
- _____ (1983) 「格文法理論」 安井稔・西山佑司・中村捷・山梨正明・中右実 『意味論』 英語学大系5, 467-547. 東京:大修館書店.
- _____ (1987) 「深層格の核と周辺-日本語の格助詞からの一考察-」 『言語学の視界』 59-72. 東京:大学書林.
- _____ (1989a) 「言葉の認知と意味の計算(I)」 『数理科学』 309, 18-22. 東京:サイエンス社.

- _____ (1989b) 「言葉の認知と意味の計算(II)」 『数理科学』 310, 78-83.
東京:サイエンス社.
- 山梨正明・辻井潤一 (1985) 「格解釈と認知機構」 『日本認知科学会論文集』,
53-4.
- Akiba, K. (1977) "Conjunction TO and Postposition TO in Japanese," Chicago Linguistic Society 13, 1-14. Chicago Linguistic Society.
- Anderson, S.R. (1971) "On the Role of Deep Structure in Semantic Interpretation," Foundations of Language 7, 387-96.
- Cooper, R. (1976) "Lexical and Nonlexical Causatives in Bantu," In Syntax and Semantics 6 (Shibatani, M. ed.), 313-24. New York:Academic Press.
- Cooper, W.E. and J.R. Ross (1975) "World Order," Papers from the Parasession on Functionalism, 63-111. Chicago Linguistic Society.
- Dillon, G.L. (1977) Introduction to Contemporary Linguistic Semantics. Englewood Cliffs, N.J.:Prentice-Hall.(安井稔訳『現代英語意味論』(1984) 東京:研究社出版. 13-5.)
- Fillmore, C.J. (1968) "The Case for Case."他.(田中春美・船越道雄訳『格文法の原理-言語の意味と構造-』(1975) 東京:三省堂.)
- _____ (1977) "The Case for Case Reopened," In Syntax and Semantics 8 (Cole, P. and J.M. Sadock eds.), 59-81. New York:Academic Press.
- Fraser, B. (1971) "A Note on Spray Paint Cases," Linguistic Inquiry 2.4, 604-7.
- Givón, T. (1976) "Some Constraints on Bantu Causativisation," In Syntax and Semantics 6 (Shibatani, M. ed.), 325-51. New York:Academic Press.
- _____ (1984) Syntax:a functional-typological introduction 1, 115-7. Amsterdam:John Benjamins Publishing Co.
- Gruber, J.S. (1976) Lexical Structures in Syntax and Semantics, 37-90. Amsterdam:North-Holland.
- Hopper, P.J. and S.A. Thompson (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse," Language 4, 251-99.
- Jackendoff, R.S. (1972) Semantic Interpretation in Generative Grammar. Cambridge, Mass.:The MIT Press.
- Kageyama, T. (1980) "The Role of Thematic Relations in the Spray Paint Hypallage," Papers in Japanese Linguistics 7, 35-64.
- Searle, J.R. (1990) "Collective Intentions and Actions," In Intentions in Communication (Cohen, P.R., J. Morgan, and M.E. Pollack eds.), 401-15.

Mass.:The MIT Press.

Talmy, L. (1975) "Semantics and Syntax of Motion," In Syntax and Semantics 4 (Kimball, J.P. ed.), 181-232. New York:Academic Press.

Walmsley, J.B. (1971) "The English Comitative Case and the Concept of Deep Structure," Foundations of Language 7, 493-507.

Yoshimura, Y. (1985) "Symmetric and Pseudo-symmetric Predicates," Kansai Linguistic Society 5, 21-8. Kansai Linguistic Society.

(さだのぶ としゆき、博士後期課程)